

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.233

2012年10月

防災人材育成研修「防災・減災カレッジ」を開講



目次

●ニュース	
防災人材育成研修「防災・減災カレッジ」を開講	3
サイエンスイラストレーション・サマースクール2012 in あいちを開催	4
石岡繁雄氏の旧蔵資料が本学に寄贈・寄託される	4
●知の未来へ	
短半減期化学物質の生物学的曝露モニタリング	5
上山 純 (大学院医学系研究科准教授)	
●知の先端	
北前船主と近代日本の産業化	6
中西 聡 (大学院経済学研究科教授)	
●教育の研究とプラクティス	
高大連携事業 教育学部附属高等学校生徒がモンゴルで研修	8
教育学部附属中・高等学校	
●部局ニュース	
テクノ・フェア名大2012を開催	10
メディカル・デバイス産業振興協議会による医療現場視察会を実施	11
平成24年度 SSH 中核的拠点育成プログラムワークショップ教員研修を開催	11
体験学習「たたら製鉄実験」を開催	12
第82回防災アカデミーを開催	12
平成24年度目録システム地域講習会を実施	13
第26回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	13
第16回博物館特別展「大モンゴル展」を開催	14
実験展示「メディアアート展」を開催	15
第2回地球教室を開催	15
●資料	
平成23年度決算のトピックス	16
●受賞者一覧	21
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年8月16日～9月15日	23
●イベントカレンダー	27
●ちょっと名大史	
学部の誕生と草創期③ ー 理学部 ー	32

「防災・減災カレッジ」 防災人材育成研修 を開講





	2	3	1 講義をする福和センター長
			2 防災基礎研修の様子
1			3 受付の様子

防災人材育成研修「防災・減災カレッジ～地域協働による“ひと・まち・みらい”の創造～」が、7月28日(土)、8月3日(金)、4日(土)、18日(土)、21日(火)、25日(土)、豊田講堂、環境総合館等において開講されました。同研修は、行政、事業者団体、地域団体、ボランティア団体等で構成され、災害被害の軽減に向けて県民運動を推進している「あいち防災協働社会推進協議会」が今年度から始めたもので、本学のほか、愛知県、名古屋市、愛知県商工会議所連合会、一般社団法人中部経済連合会、防災のための愛知県ボランティア連絡会、なごや災害ボランティア連絡会が共催しました。

初日の7月28日(土)は、豊田講堂において「防災基礎研修」6科目の講義が行われ、今年度同カレッジに入学し

た約300名の市民が参加しました。

午前中は、福和減災連携研究センター長による「防災概論」、山岡環境学研究科附属地震火山研究センター長による「自然災害概論」、夏目吉昌愛知県防災局防災危機管理課長による「防災行政概論」の講義が行われました。

午後からは、村上誠二岩手県陸前高田市市長洞元気村事務局長が、「3.11を振り返って」と題して、被災地の地域コミュニティを維持するために奔走する長洞元気村の活動を紹介しました。長洞元気村は、東日本大震災で被災した陸前高田市広田町長洞地区の住民が居住している仮設住宅団地です。さらに、栗田暢之特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事による「防災ボランティア論」、渡辺研司名古屋工業大学工学研究科教授による「企

業防災概論」の講義が行われ、受講者は熱心に聴講していました。

また、8月3日(金)以降に「市民防災」、「企業防災」、「防災行政」、「地域防災」、「防災ボランティアコーディネーター」の計5コースに分かれてそれぞれ2日目と3日目の講義を受講し、さらに救命救急講座等を選択受講するなどした受講生は、「防災・減災カレッジ防災リーダー」や「防災・減災カレッジ防災ボランティアコーディネーター」、「防災・減災カレッジまちづくりアドバイザー」の資格を取得しました。

同研修は、減災連携研究センターが全面協力して開催しており、優秀な防災・減災人材の育成を通じて地域の防災力を高めていくという形での「大学と地域との連携」が、いよいよ本格的に始動しはじめたこととなります。

サイエンスイラストレーション・サマースクール2012 in あいちを開催

サイエンスイラストレーション・サマースクール2012 in あいちが、8月28日(火)から30日(木)までの3日間、全学教育棟において、在米のイラストレータである奈良島知行氏のコーディネートにより開催されました。これは、8月から9月にかけて行われた、サイエンスイラストレーションを愛知県に紹介する企画群の主要企画として開催された



グリッドを活用したオブザーベーションドローイングを説明するジェニファー助教(前列右)

ものです。

昨年創立100年を迎えた米 ジョンズ・ホプキンス大学よりジェニファー・エリザベス・フェアマン医学部医療アート専攻助教を招き、3日間で頭がい骨のイラストを仕上げる全9コマの入門コースのほか、初日の3コマで受講を認定するリーディング大学院プログラム向けのスキルセミナー、最初の座学講義のみを公開する特別セミナー「サイエンスイラストレーション概論」を複合して実施し、学内外から合計で31名が参加しました。

また関連企画として、8月6日(月)から17日(金)までの間は医学部基礎研究棟において、8月28日(火)から9月7日(金)までの間はケミストリーギャラリーにおいて、企画展「サイエンスを絵で伝える」を開催しました。

さらに、8月30日(木)には、名古屋テレビ塔の地上90mにある展望台「スカイデッキ」において、高北幸矢名古屋造形大学前学長をホストに、さかえサイエンストーク「表現の本質」を開催しました。

石岡繁雄氏の旧蔵資料が本学に寄贈・寄託される

石岡繁雄氏の旧蔵資料が、8月27日(月)、本学博物館に寄贈、大学文書資料室に寄託されました。石岡氏は、井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなった、いわゆる「ナイロンザイル事件」の当事者で、次女の石岡あづみ氏により、ダンボール120箱分にも及ぶ資料が寄贈・寄託されました。

石岡繁雄氏は、本学旧教養部の前身である第八高等学



「石岡繁雄の志を伝える会」の方々による整理作業中の資料(写真は中日新聞社提供)

校、名古屋帝国大学工学部の卒業生で、在学中は山岳部で活躍し、戦後は本学職員として勤務していました。その後、豊田工業高等専門学校、鈴鹿工業高等専門学校の教授を歴任すると同時に、山岳用具や介護用具の研究開発にも従事し、多くの特許を取得しました。

昭和30年に起こった山岳遭難事故で実弟を失った石岡氏は、その原因が遭難者のミスではなく、新製品であったナイロン製のザイル(ロープ)にあることを明らかにし、同じような事故の続発を防ぐため、当時の企業やアカデミズムなどを相手に粘り強く戦い、ついにはその主張の正しさが認められるに至りました。

今回の寄贈・寄託は、消費者の安全に対する企業やアカデミズムの責任を問う社会問題となったナイロンザイル事件や日本山岳史の資料としてはもとより、本学の歴史を明らかにする資料としても大変貴重なものもあり、さまざまな用途に活用されていくことが期待されます。新聞でも大きく報じられ、社会的な注目を集めました。

短半減期化学物質の生物学的曝露モニタリング

大学院医学系研究科准教授
上山 純

る方法を確立すること、2) 適当な生体試料（血液、尿、呼気、毛髪など）および採取方法を選択し、得られた結果による曝露レベル評価の有用性と限界を知る必要があります。私の研究の特色は尿に排泄される殺虫剤の代謝物をガスおよび液体クロマトグラフ質量分析計（タンデムマス）を用いた分離分析法にて測定系を確立し、厳格な精度管理の下でそれを一般生活者集団および職業的曝露群に応用し、有用性の評価ができることです。定量データの国際比較を可能にするため、海外の研究施設と共同で測定結果の精度管理を実施していることも他にはない特色の一つです。特筆すべき最近の研究成果は、1) 使い捨てオムツを用いた尿中ピレスロイド系殺虫剤代謝物測定法の開発により、排尿が自立していない新生児および小児の殺虫剤曝露バイオモニタリングを可能としたこと、2) 一般健常人、農業従事者および害虫防疫事業者を対象とした有機リン系殺虫剤曝露バイオモニタリング (Chemosphere 87, 2012) により、有機リン系殺虫剤曝露量は冬より夏に多く、害虫防疫事業者は一年を通して一定の殺虫剤に曝露している等、それぞれの職域の曝露様式を明らかにしたことです。文献上の他国データとの比較により、日本人の有機リン系およびピレスロイド系殺虫剤曝露量は同等かそれ以下であることが示唆されました。

マニュアルに従って分析すれば誰でも定量データの数値を得ることができます。しかし、その値に高い信頼性を付加すること、あるいはサンプル採取法や分析手法に起因する測定誤差がどの程度曝露バイオモニタリングに影響するかの情報を提供することは化学物質のリスクアセスメントの発展に必要な要素であり、今後の研究課題の一つとして真摯に向き合いたいと思います。

生物学的曝露モニタリングとは「有害物質に曝露したヒトの血液、尿、呼気などを採取して、その中の有害物質やその代謝物の濃度を測定することによって、ヒトの曝露の程度を推測（曝露評価）すること」と定義され、有害危険性の程度の評価（化学物質のリスクアセスメント）には必須とされています。これまでは職業的に生じる化学物質曝露について主に使用されてきましたが、近年では一般生活環境中での化学物質曝露にも応用されるようになりました。この応用を可能にしたのは、高感度測定技術の発展が大きく寄与しているものと思われませんが、バイオモニタリングで得られた測定結果が社会的に与える影響を考慮すれば、測定結果の信頼性確保のための厳格な精度管理システムの構築も併せて行う必要があります。

現在、私は短半減期化学物質、主に殺虫剤（農薬を含む）曝露のバイオモニタリングの実用化に向けて研究を進めています。「殺虫剤って体に悪いの!?!」「殺虫剤使っていないから私は関係ない」と思われる方もいますが、一般生活環境中での低用量殺虫剤曝露が健康影響を及ぼすという疫学データがいくつかの海外研究グループから報告されています。また我々は、有機リン系およびピレスロイド系殺虫剤にはほぼすべての日本人が日常的に曝露していることを明らかにしています。これらのさらなる詳細な研究実施のためには、可能な限り正確な曝露バイオモニタリング法を確立・応用することが必須であり、日本における農薬使用量が世界的にトップレベル（農耕地面積あたりの有効成分使用量はOECD加盟国で一位）であることを考慮すれば、日本が積極的に取り組むべき研究課題だと言えます。

殺虫剤の生物学的曝露モニタリング実施には、1) 標的物質を簡便で、精度・再現性高く分析す

北前船主と近代日本の産業化

中西 聡 大学院経済学研究科教授

近代経済成長という言葉からイメージされるのは、大規模な工場が多数設立され、大量生産が行われて物質的な豊かさを人々が享受できるようになった社会と思われまゝ。つまり、「工業化」に成功することが経済成長の鍵と考えられてきたわけ。日本のなかでそれを達成したのが、東京湾岸地域から伊勢湾岸地域・大阪湾岸地域・北九州地域に至る太平洋ベルト地帯であったと言えます。確かに、これらの地域では「工業化」の成功の結果、平均的な個人所得は他の地域よりもかなり上回り、娯楽を含む多様な公共サービスを他の地域よりも受けられるようになったと思われまゝ。

しかし、視点を変えると、一人当たりの居住面積、持ち家率などは、東京・大阪の大都市よりも北陸地方がかなり上回り、数年前までは一世帯当たりの所得も、北陸地方が東京・大阪を上回っていました。農村工業が展開した北陸地方では、農業と工業のバランスを保ちつつ産業化が進展した結果として、自然環境を維持しつつ、成人家族がいずれも収入を得ることで、一人当たりの所得ではなく世帯所得を増大させることになったと思われまゝ。

つまり、近代日本の産業化には、東京や大阪に代表されるような「工業特化」型の産業化と、北陸地方に代表されるような「農工連関」型の産業化の大きく2つの経路があり、このどちらを辿ることになったかにおいて、それぞれの地域の出資者（有力資産家）の志向性が大きく影響を与えたのではないかと思います。

私は、このような問題関心から、北陸地方の有力資産家であった北前船主の経営分析を行いました（中西聡『海の富豪の資本主義』名古屋大学出

版会、2009年）。北前船主とは、19世紀に日本海航路において買積形態で活躍した船（北前船）の船主のことです。買積形態とは、船主が自分の船の積荷を自ら買い入れて別の港に運んで販売することで、商業と輸送業を兼ねる経営形態のことでした。買積形態であれば、地域間価格差を活かして、船主が自己荷物の売買で大きな利益を挙げることがある一方で、海難の際には、積荷の損失を全て自分が負い、また物価下落時には、買入価格よりも販売価格が安くなるなど、リスクも大きかったので、ハイリスク・ハイリターンを目指す経営形態でした。ただし、一口に北前船主といっても、その経営志向性はさまざまでした。表は、主要北前船主の経営志向性を、地域志向性が強いのか広域志向性が強いのか、社会志向性が強いのか家業（家産）志向性が強いのか、低リスクを重視するか高蓄積を重視するかの視点から整理したものです。

こうした志向性の違いとそれぞれの北前船主の経営形態の特徴が対応していました。すなわち、生産過程へ進出して、生産・集散地への輸送・集散地での販売を一貫して行うようになった垂直統合経営の北前船主は、広域志向性が強く、高蓄積を重視したため、遠隔地間の地域間価格差を活かして多大の収益を得たものの、地域社会よりも自家の家業の発展を優先しており、地域経済への関与は少なかったと言えます。一方、地域志向性が強く、近世期から御用輸送を引き受けた北前船主は、封建的支配権力とつながることで多大の収益を得たものの、封建的支配権力への御用金負担が大きく、資産形成に限界があり、近代に入って封建的支配権力の保護がなくなるとともに衰退しました。

表 主要北前船主の経営志向性

家名	形態	地域⇄広域		社会⇄家業（家産）		低リスク⇄高蓄積	
西川	垂直統合	△	○	○→△	○	△	○
藤野	垂直統合	△	◎	△	○	△	◎
酒谷	垂直統合	×	○	△	○	△→○	◎→△
右近	垂直統合	×	○	△	○	△	○
西村	垂直統合	×→△	◎	△	○	×	◎
野村	複合	○	△	○	○	○	△
伊藤	複合	○	○	△	○	○	△
熊田	複合	○	○	○	○	○	△
大和田	複合	○	○	○	○	○	△
宮城	複合	○	○	○	○	△	○
馬場	複合	◎	△	○	○	○	△
秋野	複合	◎	×	○	○	◎	△
瀧田	複合	◎	×	○	○	◎	△
斎藤	複合	◎	×	◎	○	○	△
菅野	複合	◎	×	◎	○	○	△
宮林	御用	◎	×	○	△	○	△
古河	御用	◎	×	○	△	○	△
木谷	御用	◎	×	○	△	○	△
内田	御用	◎	×	○	△	○	△
藤井	御用	◎	△	◎	×	○	△

注記) 地域志向性は地元への執着度、広域志向性は支店・生産拠点の設置状況、社会志向性は地域経済への関与の度合、家業（家産）志向性は自家経営への優先度、低リスク志向性は土地・公債への傾斜度、高蓄積志向性は漁業・中央株への傾斜度などから判断した。→のある場合は、19世紀までと20世紀で志向性が転換した家。◎が最も志向性が強く、◎→○→△→×の順に志向性は弱くなる

結果的に、地域経済へ深く関与したのは、それぞれの志向性が偏らずにバランスのとれた北前船主で、リスク分散のために家業を多角化して複合経営を行いました。その複合経営において、土地経営や農産物を原料とする醸造経営など農業と関連する分野が多く、彼らの経営展開そのものが農業を重視するものでした。それゆえ、こうした複合経営を行った北前船主を多数輩出した北陸地方

では十分な「工業化」を達成することはできませんでした。しかしそのことが逆に、北陸地方の産業化を「農工連関」型として進めることになり、自然環境を維持しながら農家兼業に相応しい生活環境を作り上げたとも言えます。

1993年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学、同年東京大学社会科学研究所助手、1995年北海道大学経済学部助教授、1999年名古屋大学経済学部助教授、2004年名古屋大学大学院経済学研究科教授（現在に至る）。博士（経済学）東京大学。
 趣味：鉄道一般、推理小説
 ひとこと：歴史における敗者の美学を学術的に表現してみたいと思っています。

なかにし さとる



高大連携事業 教育学部附属高等学校生徒がモンゴルで研修

教育学部附属中・高等学校

教育学部附属中・高等学校は、平成18年に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）校に認定され、今年度で2期2年目（通算7年目）の研究を実践しています。「高等教育に繋がる学び・学び方」を構築することが、附属中・高等学校 SSH 理論の中心の1つにあるため、生徒たちは日頃から附属学校の授業において「解答が明確でない課題」に対して積極的に取り組んでいます。そのような取組の1つに Science Literacy Project II（SLP II）があり、高校1年生では「自然と科学」、高校2年生では「地球市民学」という学校設定科目を学んでいます。これらの授業をさらに深めて学びたい意欲のある生徒は、本学の教員を中心に講義が行われる Advanced Science Literacy（ASP）を受講し自らのキャリアを形作って行きます。ASPには「生命探究講座」と「地球市民学講座」があります。



草原の遊牧民宅にゲルスティ



ゲルスティでの夕食

ASPの「地球市民学講座」を受講している生徒のうち、モンゴルの高校生と交流をしてみたい生徒が集まり Global Committee という SSH クラブが発足しました。本学とモンゴルは非常に関係が深く、毎年多くの教員や学生がモンゴルを訪れており、最近では益川敏英本学特別教授がモンゴルを訪問し講演を行いました。Global Committee のメンバーは毎月1回、大学内の法制国際教育協力研究センター（CALE）にあるテレビ会議システムを利用して、中村真咲特任講師の指導のもと、新モンゴル高等学校の生徒とテレビ会議交流を進めてきました。その交流のフィールドワークとして、実際に新モンゴル高等学校を訪問し、画面を通してのディスカッションではなく、実際に会ってのディスカッションが実現しました。

実現するまでのステップは以下の通りです。

2011年

- 9月より CALE でのテレビ会議（毎月1回）
- 10月3日 ジャンチブガルバドラホ新モンゴル高等学校校長による講演（於附属学校）
- 11月12日 CALE 主催の高校生セミナー「アジアの法と社会」に参加（於 CALE）

2012年

- 6月2日 本校卒業生が主催する The Coloring Project に参加
- 7月11日 城所卓雄前駐モンゴル日本国大使による講演（於附属学校）
- 7月13日 モンゴルから教育学部に留学しているエレンゲレルさんとのセッション（於附属学校）



清水大使との記念撮影

このような事前学習を経て2012年8月に附属高等学校の生徒6名と引率教員3名でモンゴルへ出発しました。モンゴル滞在中は、新モンゴル高校の生徒宅でのホームステイや、草原の遊牧民宅でのゲルステイを通して現地の風土にできるだけ溶け込む体験を重視しました。また、SSHの趣旨を生かし、モンゴル科学技術大学内の名古屋大学博物館フィールドリサーチセンターやモンゴル国立大学内の名古屋大学日本法教育研究センター訪問し、現地での貴重な話を聞くことができました。またモンゴル滞在中は、日本大使館を表敬訪問して清水武則駐モンゴル日本国大使と面会し、「高校生に期待すること」について話を聞くことができました。また、モンゴルを訪問中の加藤重治文部科学省国際統括官、松浦晃一郎前ユネスコ事務局長、野口 昇日本ユネスコ協会連盟理事長とも面会する機会があり、ユネスコスクールに認定されている附属学校のESD活動を紹介するとともに、世界で中心的に活動している方々と意見を交換することができたことも貴重な経験でした。

高大連携を生かした附属高等学校生徒のモンゴル研修は、新モンゴル高等学校との交流を基本に、さらにアカデミックな研修になるよう、次年度も継続して行う予定です。また、本学で学んでいる新モンゴル高等学校の卒業生が数多くいる利点も生かし、名古屋大学、附属学校、モンゴルのトライアングル体制を発展的に捉えていく考えです。



加藤国際統括官、松浦前事務局長、野口理事長との記念撮影

研修日程・時程

平成23年8月16日(木)～8月24日(金) 8泊9日

日付	地名	実施内容
16日	愛知 ウランバートル	出国 《ホテル泊》
17日	カラコルム	カラコルム遺跡見学 (エルデニゾー寺院、亀石、 カラコルム博物館見学) ブルドへ移動 《ツーリストキャンプ泊》
18日	カラコルム	ホスタイ国立公園 野生の馬(タビ)を観察 アルタンボラグ村の遊牧民ファミリー を訪問(遊牧文化学習) 《モンゴル遊牧民ゲルでホームステイ》
19日	カラコルム	遊牧民生活を体験(乗馬など) 《ホテル泊》
20日	ウランバートル	ウランバートル市内観光 (ガンダン寺、自然史博物館、 ウール製品の店) 日本大使館表敬訪問 (清水大使と会談) 新モンゴル高校にてホストファミリー と対面 《ホームステイ》
21日	ウランバートル	新モンゴル高校 サマースクールに参加 ・新モンゴル高校生徒との交流会 (本校生徒のプレゼン、モンゴル 生徒の出し物) ・新モンゴル高校生徒とディスカッ ション ・ゲルの組み立てと解体 《ホームステイ》
22日	ウランバートル	ウランバートル市内観光 (日本人墓地、スフバートル広場) 乗馬体験 《ホームステイ》
23日	ウランバートル	新モンゴル高校 加藤国際統括官、松浦前事務局長、 野口理事長と会談 モンゴル科学技術大学内の名古屋大学 博物館フィールドリサーチセンター 訪問 モンゴル国立大学内の名古屋大学の 日本法研究教育センター訪問 モンゴル民族舞踊見学 《機内泊》
24日	愛知	帰国

テクノ・フェア名大2012を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、8月31日(金)、豊田講堂及びシンポジオンホールにおいて、大学院医学系研究科、大学院環境学研究科、大学院情報科学研究科、大学院創薬科学研究科、エコトピア科学研究所、シンクロトン光研究センター、グリーンモビリティ連携研究センター、減災連携研究センターの共催のもと、テクノ・フェア名大2012「未来を明日に近づける技術」を開催しました。

同フェアは、講演会、大学にある技術シーズ(種)、研究成果のブース展示、研究室公開等を通じて、産学官連携や地域産業の更なる活性化を促し、さらに大学の最新の研究成果を産業界や地域社会に広く情報発信することを目的として毎年開催しているものです。13回目となる今回は、政府・自治体関係者、中部地区の経済界、企業の研究開発担当者等約1,100名の来場がありました。

午前中の講演会では、主催者を代表して鈴置工学研究科長からあいさつがあった後、福田敏男工学研究科教授から「マイクロ・ナノロボットシステムへの招待-マルチスケールロボットへのいざない-」、堀 勝工学研究科教授から「未来をつくるプラズマ」と題した基調講演が行われ、聴講者延べ510名は熱心に聞き入っていました。

引き続き2ヶ所の会場に分かれてミニ講演が行われ、ブース展示のうち23の研究シーズ・研究成果について、出展担当教員が出展内容や研究を紹介しました。昨年度に引き続き今年度も、国民との科学・技術対話の推進が求められる「最先端・次世代研究開発支援プログラム」、「グローバルCOEプログラム」及び「科学研究費助成事業」の研

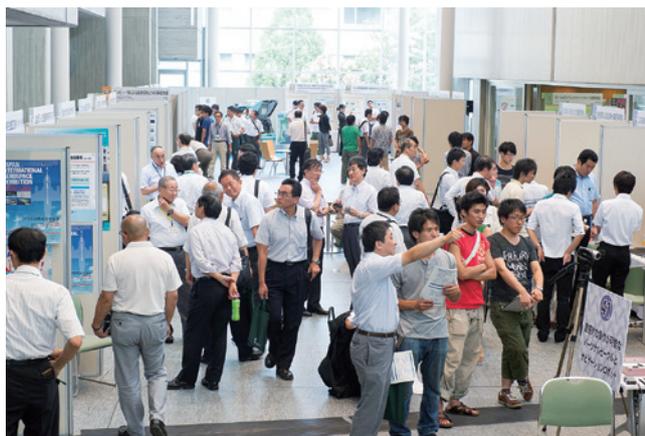


基調講演の様子

究課題について講演が行われました。各ミニ講演では、活発な質疑応答があり、熱心にメモをとる参加者の姿が見られました。聴講者数は過去最高の延べ1,461名となりました。

ブース展示会場では、企業の研究開発担当者等が多数詰めかけ、各ブースの担当者による研究成果の説明や実用化に向けての相談、意見交換等が活発に行われるなど、企業側が同フェアに対して高い関心と大きな期待を寄せていることがうかがえました。また、「技術相談・共同研究等受付コーナー」では、産学官連携推進本部所属の産学官連携コーディネータが、企業からの技術相談に途切れることなく対応し、産学連携に向けた良い機会となりました。

その他、大型展示として「ナビゲーションロボット」、「小型電気自動車COMS」、「大腸診断支援システムと外科手術支援システムの紹介」、「ANGバイオメタン自動車の試乗」等の展示もあり、参加者は未来の技術を身近に感じたようでした。午後から並行して行われた研究室見学にも延べ123名の参加があり、教員や大学院生の説明に熱心に聞き入っていました。



ブース展示会場の様子



大型展示「大腸診断支援システムと外科手術支援システムの紹介」

メディカル・デバイス産業振興協議会による医療現場視察会を実施

●医学部附属病院

医学部附属病院は、8月29日(水)、メディカル・デバイス産業振興協議会による医療現場視察会を実施しました。同協議会は、名古屋商工会議所の声かけにより地域の医療機器産業振興を担うことを目的として今年6月に発足したもので、今回は、27名が視察に訪れました。

初めに松尾医学部附属病院長から歓迎のあいさつがあ



教育用シミュレータを見学する様子

り、次いで、水野正明同院教授及び吉田安子子防早期医療創成センター特任教授も加わって、「名大病院の目指す医療と産学連携の取り組み」、「先端医療・臨床研究支援センターの体制とプロジェクト」、「産学連携による医療機器開発の試み」という3つのテーマで、医療分野における産学連携の現状について説明しました。続いて、同協議会一行は3つのグループに分かれ、ダ・ヴィンチ(手術支援ロボット)、医学生や医療従事者向け卒前・卒後の教育用シミュレータ、脳血管撮影機器、自動検体搬送検査システム等を見学しました。

見学終了後には、トヨタ自動車株式会社相談役である立花貞司同協議会代表理事及び経済産業省中部経済産業局長である紀村英俊同協議会理事から、「病院で使用されている医療機器の分野には、『ものづくり』を得意とする東海地方の企業ならではの社会貢献の余地が残されていることを確信したので、今後の産学連携・医工連携の可能性を探っていきたい」とあいさつがありました。最後に、松尾病院長からも、「大学病院と地元産業界との連携の糸口を探りながら、今回の視察会が、医療機器の開発や最先端医療の導入に繋がることを期待したい」と発言がありました。

平成24年度SSH中核的拠点育成プログラムワークショップ教員研修を開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、8月20日(月)、21日(火)の2日間、理学部F館及びG館において、平成24年度SSH(スーパーサイエンスハイスクール)中核的拠点育成プログラムワークショップ教員研修「真核生物の選択的遺伝子発現をRT-PCRで見るー恒常的発現と調節的発現ーその2」を開催しました。



実習風景

今年で5回目となる同研修は、愛知県内の高等学校の理科教員に生命科学の進展を体験してもらうことを目的としており、14校から17名の教員が参加しました。講師は杉山康雄遺伝子実験施設准教授が務め、6名のティーチング・アシスタントが補佐しました。

研修は講義と実験から構成されており、初日は、杉山准教授がiPS細胞を題材にして真核生物の遺伝子発現の調節機構を概説しました。続いて、ヒトの唾液腺、筋肉、膵臓から単離したリボ核酸(RNA)に逆転写酵素(RT)を作用させて相補的デオキシリボ核酸(cDNA)とし、特異的プライマーを使って遺伝子を増幅しました(これをRT-PCR法といいます)。2日目は、臓器特異的に発現する遺伝子とどの臓器にも普遍的に発現する遺伝子を確認する方法を体験しました。最後に、同施設に設置された次世代DNAシーケンサーを見学し、井原邦夫同施設准教授が、次世代DNAシーケンサーを使った最新の研究について説明しました。

このように、真核生物における遺伝子発現の様子はRT-PCR法によって初めて調べられることを体験し、原核生物と真核生物における遺伝子の発現調節を比較するなど、今後の高校での授業に役立つ研修になったようです。

体験学習「たたら製鉄実験」を開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、8月18日(土)、19日(日)の2日間、体験学習「たたら製鉄実験」を開催しました。これは、平成24年度総長裁量経費地域貢献特別支援事業として、小中学生を対象に実施したものです。

同センターは、鉄製文化財である日本刀、鉄鍋や鉄釘、また、製鉄遺跡から出土した鉄滓や木炭等を放射性炭素



たたら製鉄実験の様子

(^{14}C) 法により年代測定し、古代日本における製鉄や鉄の利用を研究しています。たたら製鉄は、木炭と砂鉄を用いて金属鉄を作る古代の製鉄技術であり、金属鉄に微量に含まれる炭素が製鉄に用いた木炭に起源を持つことを基礎にして、鉄製品の ^{14}C 年代測定を行います。

今回の製鉄実験では、たたら製鉄の経験が豊かな財団法人元興寺文化財研究所の協力を得て行われ、初日は、たたら製鉄の原理、炉の構造や実験計画を説明したあと、参加者全員で砂鉄の分割、木炭小片の作成を行いました。さらに、砂鉄の性質、起源、収集方法の解説や、渥美半島産砂鉄や実験に用いた佐賀県浜玉海岸産の砂鉄を顕微鏡で観察し、砂鉄に関する理解を深めました。

2日目は、炉に点火し、炉内の温度計測、砂鉄や木炭の投入量の記録を行いながらたたら製鉄を実施しました。鉄滓の除去がうまくいかず、10kgの砂鉄から、金属鉄と鉄滓の混合物約5kgが回収され、参加者に分配されました。最後に、山田哲也元興寺文化財研究所研究員により、製鉄の歴史に関して解説が行われました。

9名の参加者と6名の保護者が実習に積極的に加わり、古代製鉄への理解を深めました。

第82回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、8月30日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第82回防災アカデミーを開催しました。

今回は、稲田眞治名古屋第二赤十字病院救急科部長が、「5カ月に及ぶ震災被災地への医療支援でみえたこと」と題して講演を行い、東日本大震災時の医療救護班の派遣概



講演する稲田部長

要をはじめとして、実際に現地へ医療支援に赴いた際の状況などについて、詳しく話をしました。

医療救護活動に関し、石巻医療圏では、超急性期(～3日)は医療ニーズの探索、急性期(7日～2週間)は巡回診療による医療ニーズの評価、亜急性期(～1カ月)は医療救護の計画と実施、慢性期(～約半年)は被災地の医療の自立を目指す、といった災害サイクルで行われたことなどが紹介され、今後は、迅速な派遣が可能な医療チームの養成や、医療本部の適切な準備で被災に備える必要があることを強調しました。

参加者は103名にのぼり、講演後は、医療救護班が出発する際の携行品、医療活動における電源やガソリンの確保に関する実態、南海トラフで巨大地震が発生した際の医療活動及び電子カルテを用いた傷病者に関する情報共有などについて、活発な質疑応答が行われました。

平成24年度目録システム地域講習会を実施

●附属図書館

附属図書館は、9月5日(水)から7日(金)までの3日間、国立情報学研究所との共催で、平成24年度目録システム地域講習会(図書コース)を実施しました。

同講習会は、全国8カ所で開催され、総合目録データベースの構成、内容、データ登録の考え方を主に扱うものです。東海・北陸地区の国公私立大学等から参加した24名の



講義の様子

の受講者は、事前に課せられたWEBでのセルフラーニングも含め、熱心に研修に取り組みました。

講師は東海・北陸地区の国立大学の図書館職員7名が担当し、初日の講習終了後には受講者から提出された課題の回答の添削を行い、その結果にもとづき翌日の講義に備える等、講師自らの経験を生かした実践的な講習会となりました。

2日目には交流昼食会が開かれ、受講者からは図書館という共通の場で働く仲間の問題や悩み、講師からは目録業務のやりがいや楽しさが語られ、同じ業務に携わる図書館員としての有意義な交流の機会ともなりました。

全国の大学図書館等が所蔵する学術文献(図書・雑誌)を検索できる総合目録データベースは、CiNii Booksとしてインターネットで広く利用されています。講習会の修了者が、1億1千万件の所蔵件数を超える同データベースの品質維持に貢献することが期待されます。

第26回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館

附属図書館は、9月11日(火)、同館5階多目的室において、同館友の会第26回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、講師として青嶋由美子豊橋創造大学教授を招き、「音楽小説を聴く」と題した講演が行われ、学内外から22名の参加がありました。

講演では、音楽にまつわるストーリーが展開される「音



講演する青嶋教授

楽小説」の中から、最近話題となったものを中心に取り上げ、小説に登場した音楽とともに紹介されました。「音楽小説」という言葉は確立されているものではありませんが、今回は音楽を演奏する人物たちと、彼ら・彼女らによって演奏される音楽がテーマとして扱われる作品、大島真寿美著「ピエタ」、浅葉なつ著「サクラの音がきこえるーあるピアニストが遺した、パルティータ第2番ニ短調シャコンヌ」、丸谷オ一著「持ち重りする薔薇の花」、美奈川 譲著「ドラフィル! 竜ヶ坂商店街オーケストラの英雄」、中原毅志著「悠久のソナタ」の5作品を取り上げました。作品のあらすじと、人物相関や講師のお気に入りの点などが紹介され、その中に登場するクラシック曲を、作曲者や時代背景などを説明して実際に鑑賞しました。時間の制限もあり、曲のほんの一部分を聴くにとどまりましたが、「音楽のゆふべ」といった雰囲気の会となりました。

参加者からは、「本を読むだけでは知ること、感じることでできない『音』を一緒に楽しむことができた」「音楽を意識することでより深く本の世界に入る楽しみを見つることができた」といった感想が寄せられました。

第16回博物館特別展「大モンゴル展」を開催

●博物館

博物館は、3月17日(土)から8月31日(金)までの間、第16回博物館特別展「大モンゴル展」を開催しました。同展は、第1部「モンゴルの自然、鉱物資源、近代化、環境問題」と第2部「モンゴルの伝統文化」に分けて開催され、延べ13,593名の来館者がありました。

会期中には、共催のモンゴル科学技術大学から、ハムスレン同大学附属博物館長、バトバヤル・トゥデヴ同大学副学長及びマンガルジャラブ・チメド同大学電力学部長が視察に訪れ、後援の駐日モンゴル国大使館から、レンツェンドーギーン・ジグジッド特命全権大使及びエルデネ副領事が来館しました。その他、大相撲7月場所に合わせて大関の鶴竜関が来館し、大きな話題となりました。

なお、同館横にはモンゴル高原に住む遊牧民が使用している伝統的な移動式住居であるゲルが組み立てられ、無料で開放されました。

本学はモンゴルに2つの研究・教育センターを設置し、さらにモンゴル国立大学、モンゴル科学技術大学、モンゴル健康科学大学の3大学と学術交流協定を結んでおり、同館でのモンゴル展開催には、同国からも大きな関心が寄せられました。同展開催を機に、両国の交流がますます促進されることが期待されます。

関連イベントとして以下の特別講演会が行われました。

- 4月14日(土)「草原に埋もれた宝を求めて」
高橋裕平総括主幹(産総研東北サテライト)
- 5月9日(水)「モンゴルの地政学-北東アジアにおけるモンゴルの位置-」
城所卓雄前特命全権大使(在モンゴル日本国大使館)
- 6月2日(土)「北東アジアにおけるチベット仏教世界の近代」
荒井幸康氏(北海道大学スラブ研究センター)
- 6月9日(土)「モンゴル：その自然と環境」



ゲルの内部



第1部の展示

- 東田和弘准教授(名古屋大学博物館)
- 6月16日(土)「子孫の語る榎本武揚」
榎本隆充客員教授(東京農業大学)
- 6月16日(土)「榎本武揚が見た露清関係とモンゴル：『シベリア日記』を中心に」
醍醐龍馬さん(大阪大学大学院法学研究科)
- 7月4日(水)「創業者・三島海雲の軌跡～『カルピス』の秘密」
篠田直マネージャ(カルピス株式会社研究戦略部)
- 7月4日(水)「カルピス社における発酵乳・乳酸菌研究について」
松下晃子主任(カルピス株式会社発酵応用研究所)
- 7月21日(土)「モンゴルの詩人たち-現代に息づくモンゴル詩の伝統と文化-」
阿比留美帆元専門調査員(在モンゴル日本国大使館)
- 7月28日(土)「モンゴルの馬馬頭琴伝説からみた馬の隠喩」
藤井真湖准教授(愛知淑徳大学)
- 8月3日(金)「トルゴート・モンゴルの家族・親族」
田中華子研究員(名古屋大学博物館)



記念撮影をする鶴竜関(左)と濱口総長(右)

実験展示「メディアアート展」を開催

●博物館

博物館は、8月17日(金)から25日(土)までの間、実験展示「メディアアート展」を開催しました。展示されたのは、「Interactive Plant Growing」と題するコンピュータグラフィックス動画で、同作品を見た場合と見ない場合で、常設展示の本物のシダ植物化石を見る人の印象がどのように変わるかをアンケート調査しました。



展示の様子

作品は、オーストリアのアーティストであるクリスタ・ソムラ リンツ芸術工科大学メディアアート教授と夫のローラン・ミニヨノ氏によるもので、暗幕で囲まれた4メートル四方の実験展示コーナーに置いてある鉢植えのソテツ、ウメ、サボテンなど5種類の植物に見学者が触れると、触れた植物と同じような植物が前方のスクリーン上で成長していく(サボテンだけは、トゲに触れると映像が消えていく)ようにデザインされていました。

実質1週間の会期中に約600名の見学者があり、そのうち170名が伏見清香広島国際学院大学情報デザイン学部教授のグループによるアンケートに回答しました。

最終日の8月25日(土)には、当日教育学部附属高等学校で開催されたオープンキャンパスに参加した中学生が多くアンケートに回答し、「本物の植物に触れると、どうして画面上で植物が成長していくかが不思議だった」、「動画でサボテンが他の植物と区別してあった理由をアーティストに聞いてみたい」などの感想が聞かれました。

第2回地球教室を開催

●博物館

博物館は、8月25日(土)、26日(日)の2日間、名古屋市科学館との共催で、今年度第2回目となる親子対象ワールドセミナー「地球教室」を開催しました。

今回のテーマである「ナゴヤで化石をさがそう!」は、地球教室の定番企画として長年行っているもので、この企画は、アンモナイトやウミユリの化石は、遠くの産出地や



建材の石灰岩に含まれる化石を観察する参加者

博物館に出かけるまでもなく、街中でも建材の中に見られることを経験してもらい、「産業の根本は、自然について知り、その産物を利用することであること」を知ってもらうことを目的としています。約70名の応募者の中から抽選で選ばれた、小学校3年生から中学校2年生までの生徒とその保護者計30名が参加しました。

1日目は、同館で化石や化石のでき方に関する講義を行った後、建材としてカットされた岩石の表面に化石がどのように表れるかを知るために、現生の貝などを様々な方向に切断して、その断面を観察しました。この予習を踏まえ、2日目には名古屋駅と栄地区周辺に出かけ、壁や柱に用いられている石材の断面からさまざまな化石を発見・観察しました。名古屋駅と栄地区のそれぞれ4カ所ずつを重点的に回りましたが、これ以外にもたくさんの「化石スポット」があります。参加者は、通勤・通学など普段の生活で見慣れた場所にも、意外な自然が隠されていたことに驚きながら、興味深く化石を観察していました。

なお、これらの作業は、参加者の補助と安全確認のために、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けて行われました。

平成23年度決算のトピックス

国立大学法人は、国民その他ステークホルダー（利害関係者）に対し財政状態や運営状況に関する説明責任を果たし、自己の状況を客観的に把握する観点から、財務諸表（貸借対照表、損益計算書、利益の処分に関する書類、キャッシュ・フロー計算書、国立大学法人等業務実施コスト計算書）の作成及び公表が義務付けられています。

本学の平成23事業年度財務諸表につきましては、平成24年6月14日経営協議会の審議・了承を経て、同会議の了承日と同日に役員会においても了承・決定されたもので、平成24年9月26日に文部科学大臣の承認をいただきましたので、ここにトピックスとして公表いたします。

企業会計と国立大学法人会計の特徴及び相違

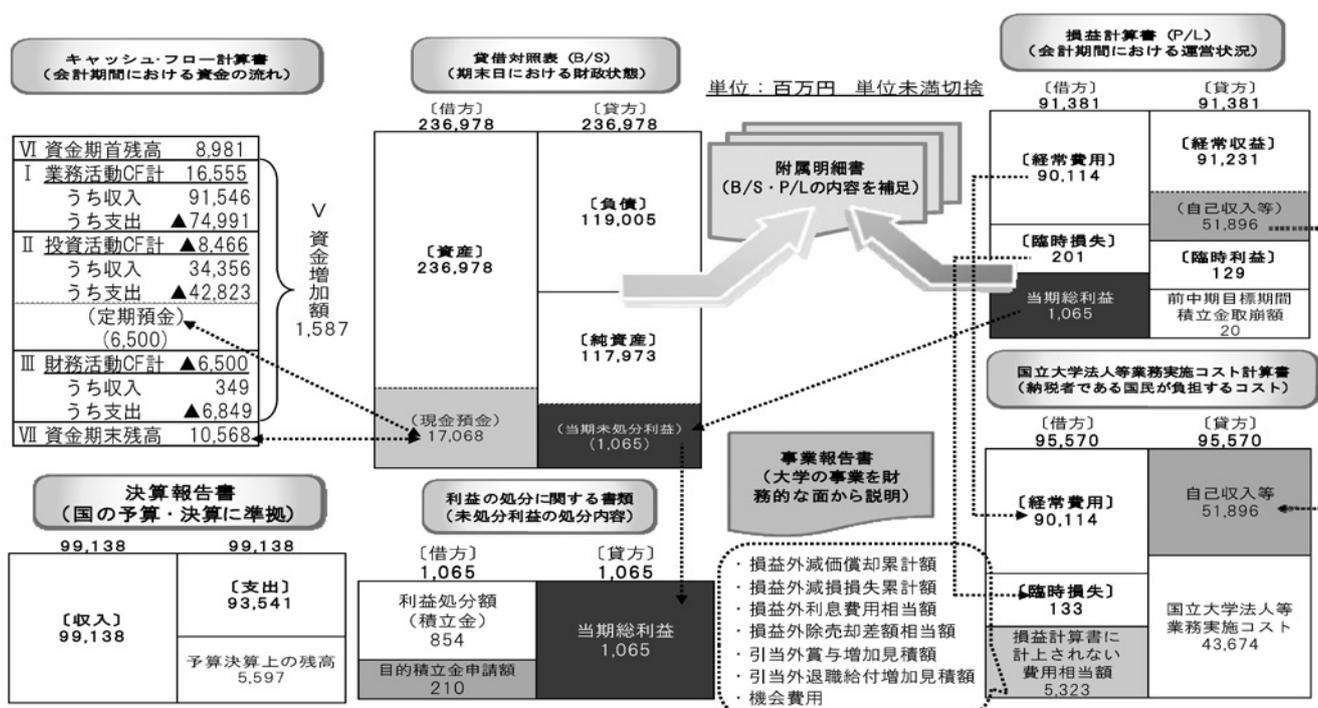
比較項目	企業会計（財務会計）	国立大学法人会計
会計的な目的	①株主・債権者の意思決定への貢献 ②取引先・利害関係者の意思決定への貢献	①国立大学法人の業務遂行の的確な理解への貢献 ②国立大学法人の業務の適正な評価への貢献
財務諸表等（報告書類）	●貸借対照表 ●損益計算書 ●キャッシュ・フロー計算書 ●利益の処分または損失の処理に関する書類 ●附属明細書	●貸借対照表 ●損益計算書 ●キャッシュ・フロー計算書 ●利益の処分または損失の処理に関する書類 ●国立大学法人等業務実施コスト計算書 ●附属明細書
情報利用者	株主、債権者、その他利害関係者	国民、学生等の利害関係者
営利性	営利	非営利
コスト開示	開示	開示
費用の認識基準	発生主義	発生主義
計画との関係	将来計画は任意開示	中期計画・年度計画の開示と遂行義務
準拠すべき会計基準	企業会計原則等	国立大学法人会計基準

国立大学法人の会計基準は、企業会計基準を基に作られた独立行政法人会計基準を国立大学法人の特徴に沿うように作成されています。

国立大学法人の主要な業務が「教育研究」であることから、

非独立採算性を前提に、国立大学法人が中期計画に基づき運営を行った場合は、「損益均衡」となるような仕組みを基本に、国立大学法人の会計制度が構築されています。

平成23年度名古屋大学財務諸表《相関関係図》

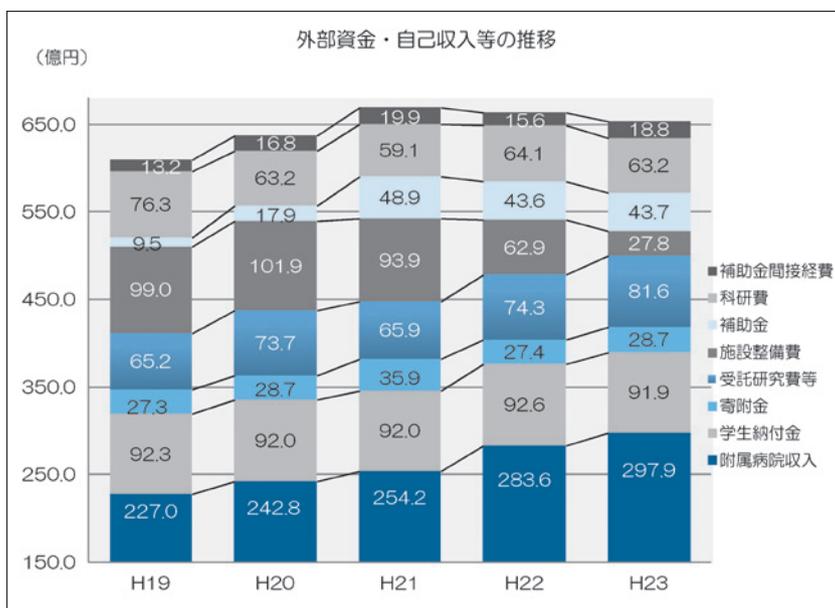


名古屋大学の収入及び主な事業の実施概要 《平成23年度》

国立大学法人は、様々なステークホルダーからのご支援より教育、研究、診療活動を行っています。そのため、多様な財源をそれぞれの目的に沿った形で効率的に活用し、特色ある大学運営を行っています。

名古屋大学は、その大学運営財源として国から交付される運営費交付金のほかに、補助金、受託研究費、寄附金などの外部資金や学生納付金、附属病院収入などの自己収入を併せ、我が国の基幹的な総合大学として、また、世界に通じる大学として名古屋大学を発展させ、社会的使命を果たしていくことを目指しています。

右図は名古屋大学の外部資金・自己収入等の概要を表しています。各年度増減はありますが、厳しい財政状況下においても安定した財務基盤の構築を目指して、日々尽力しています。



◎教育関係《留学生宿舍の整備など》



石田記念インターナショナルレジデンス妙見
(竣工：H23.8.25 建築費：449百万円)

本学が、国際競争力のある大学になるためには、優秀な留学生を多く受け入れることが重要です。

そのため、平成23年度に外国人留学生専用宿舍として、石田記念インターナショナルレジデンス妙見（93室）とインターナショナルレジデンスサウス（112室）の2棟が建設されました。隣接する国際喫煙館に居住する学生との交流を図ることにより、より一層キャンパスの国際化の進展が期待されます。



インターナショナルレジデンスサウス
(竣工：H24.2.27 建築費：408百万円)

◎研究関係《総合研究棟の整備など》

理学と農学分野の先進的研究環境の一体整備を目指し、関連する両研究科の研究室を効率的に集約し、理農館が建設されました。

2つの研究科が同じ建物に入居する合築方式は、部局間の垣根の低い風土に根ざしており、専門分野の枠にとらわれない融合的研究分野の更なる発展が期待されています。



理農館
(竣工：H23.7.15 建築費：2,625百万円)

◎診療関係《総合周産期母子医療センターの整備など》



総合周産期母子医療センター
(竣工：H23.12.21 建築費：507百万円)

本院では、平成24年4月から総合周産期母子医療センターを開設するために、平成23年度内に、母体胎児集中治療室（MFICU）6床の新設などの整備を行いました。

これにより、本院は東海地方で唯一の総合周産期母子医療センターを有する大学病院となり、今後は母体の救急救命の分野でも貢献が期待されます。

◎その他



署名した協定書を掲げる各学長

東海地区の国立大学法人8法人が、それぞれのリソースや特色を活かし、事務部門の連携を図る目的で「東海地区国立大学法人事務連携ネットワーク」が創設されました。今後、大学間連携の推進や事務処理等の共同化が期待されます。

財務情報の概要 《平成23年度名古屋大学財務諸表》

貸借対照表 [平成24年3月31日]

勘定科目等	23年度	22年度	増減	勘定科目等	23年度	22年度	増減
資産の部	2,369	2,401	▲31	負債の部	1,190	1,229	▲39
【固定資産】	2,109	2,127	▲17	借入金	422	457	▲34
土地	709	709	0	未払金	101	137	▲35
建物等	866	890	▲23	リース債務	52	47	5
設備	238	236	2	寄附金債務	96	90	6
図書等	232	219	13	資産見返負債	438	430	8
無形固定資産	6	7	▲1	その他負債	79	68	11
投資その他の資産	56	65	▲9				
【流動資産】	260	274	▲14	純資産の部	1,179	1,172	7
現金及び預金	170	172	▲2	資本金	726	726	—
有価証券等	10	30	▲20	資本剰余金	390	387	3
その他流動資産	79	72	7	利益剰余金	63	58	4
資産合計	2,369	2,401	▲31	負債・純資産合計	2,369	2,401	▲31

●資産：2,369億円（対前年度▲31億円の減少）

- 総合研究棟（理・農学系）新営：36億円、国際交流会館新営：4億円等により建物等を取得しましたが、それ以上にこれまで取得した建物等の減価償却費が上回ったため、建物等は▲23億円減少しています。
- 豊田講堂が登録有形文化財（建造物）に指定されたことに伴い、建物等が減少し、美術品（図書等）が13億円増加しています。
- H24に満期を迎える1年以内有価証券（流動資産）が減少したため、有価証券は▲20億円減少しています。

●負債：1,190億円（対前年度▲39億円の減少）

- 附属病院の再整備に係る国立大学財務・経営センター借入金を返済し、その残高が▲34億円減少しています。
- 予算の早期執行に伴う期末の未払金残高が▲35億円減少しています。

●純資産：1,179億円（対前年度8億円の増加）

- 施設費財源による資産の増加及び豊田講堂の登録有形文化財に伴う美術品（非償却資産）への振替により資本剰余金が3億円増加しています。

損益計算書 [平成23年4月1日～平成24年3月31日]

勘定科目等	23年度	22年度	増減	勘定科目等	23年度	22年度	増減
経常費用	901	850	51	経常収益	912	871	41
教育・研究等経費	160	148	12	運営費交付金収益	320	281	38
診療経費	199	203	▲4	学生納付金収益	86	98	▲12
受託研究等経費	79	72	6	附属病院収益	299	294	5
人件費	428	392	36	外部資金等収益	134	129	6
一般管理費	25	24	1	資産見返負債戻入	44	41	3
その他財務費用等	9	10	▲1	その他雑益等	27	27	0
臨時損失	2	6	▲4	臨時利益	1	1	1
当期総利益	10	14	▲4	目的積立金取崩額	0	0	0
合計	913	872	42	合計	913	872	42

●経常費用：901億円（対前年度51億円の増加）

- 補助金、受託研究費等外部資金の受入増加や、H22繰越に伴う業務費用の増加が主な増加要因です。
- H22の定年延長に伴い減少していた退職者が増加し退職手当が増加したこと、また、雇用計画の見直し及び診療機能強化に伴う採用増等により、人件費が併せて36億円増加しています。

●経常収益：912億円（対前年度41億円の増加）

- 退職手当の増加やH22からの繰越に伴い、運営費交付金収益が38億円増加しています。

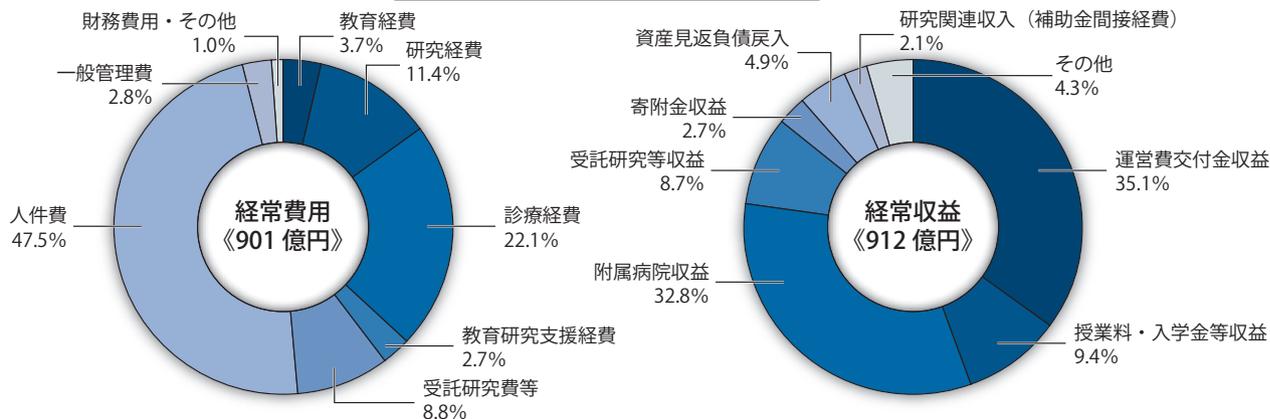
- H23より資産の購入を授業料で充当したことにより、資産見返負債へ振替したため、学生納付金収益が▲12億円減少しています（収入はH22とほぼ同額）。

- 患者数の増加や手術件数の増加等により、附属病院収益が5億円、受託研究等の受入増加により外部資金等収益が6億円、それぞれ増加しています。

●当期総利益：10億円（対前年度▲4億円の減少）

- このうち、附属病院における借入金償還額と減価償却費の差額等により、現金の裏付けのない構造上の利益がおよそ8.5億円あります。

経常費用・経常収益の構成内訳



●資金期末残高：106億円 (対前年度16億円の増加)

- 原材料等、商品又はサービスの購入による支出増 (現金のマイナス) ▲19億円減や、運営費交付金収入の▲6億円減がありますが、附属病院収入の14億円の増加、H22に第1期中期目標期間残高の国庫納付による支出が25億円あったことなどから、業務活動によるキャッシュ・フローは31億円増加しています。
- 有価証券の取得による支出減があったものの、施設費収入の▲37億円減や有価証券の売却収入が大きく減少したことなどに伴い、投資活動によるキャッシュ・フローは▲57億円減少しています。
- 資金期末残高は資金繰りを考慮し、手許現金有高を確保するため、対前年度より16億円増加しています。

キャッシュ・フロー計算書
[平成23年4月1日～平成24年3月31日]

【単位：億円】

活動区分	23年度	22年度	増減
I 業務活動によるキャッシュ・フロー	165	134	31
II 投資活動によるキャッシュ・フロー	▲84	▲27	▲57
III 財務活動によるキャッシュ・フロー	▲65	▲68	3
IV 資金増加額・減少額	16	39	▲23
V 資金期首残高	90	51	39
VI 資金期末残高	106	90	16

国立大学法人等業務実施コスト計算書
[平成23年4月1日～平成24年3月31日] 【単位：億円】

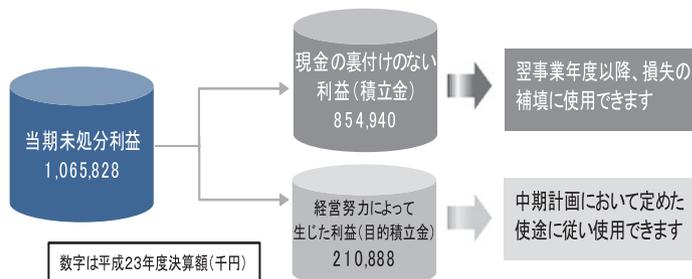
活動区分	23年度	22年度	増減
I 業務費用	383	338	45
(1) 損益計算書上の費用	902	857	45
(2) 《控除》自己収入等	▲519	▲519	0
II 損益外減価償却等相当額	43	42	1
III 損益外減損損失相当額	1	2	▲1
IV 損益外利息費用相当額	0	1	▲1
V 損益外除売却差額相当額	0	0	0
VI 引当外賞与増加見積額	▲1	0	▲1
VII 引当外退職給付増加見積額	0	10	▲10
VIII 機会費用	11	14	▲3
IX 国立大学法人等業務実施コスト	437	407	30

●業務実施コスト：437億円 (対前年度30億円の増加)

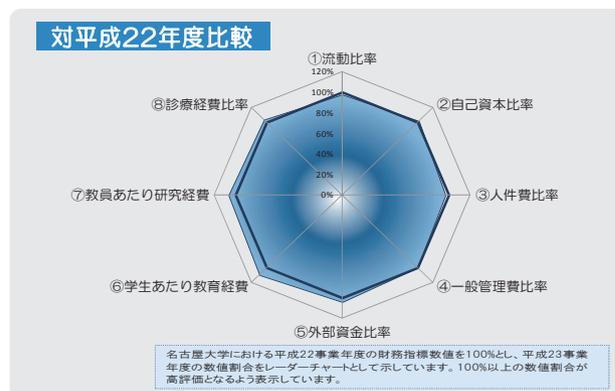
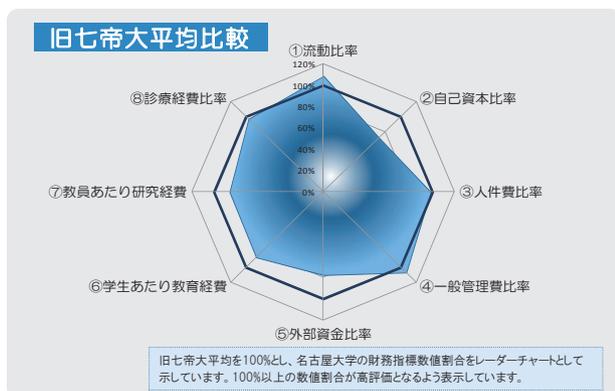
- 国立大学法人等業務実施コストとは、損益計算書のコストから、授業料等の自己資金で賄った部分を除き、国立大学法人特有の会計処理 [損益外減価償却累計額など] により計上されない業務コストを加えたものであり、国民が負担するコストを集約したものです。
- 国民に帰せられるコストはH23は437億円となっており、対前年度30億円増加していますが、業務費コストそのものが大きく増加したことが主な要因となっております。

●当期末処分利益 (利益処分案)：10.6億円

- このうち、附属病院における借入金償還額と借入金財源で購入した資産の減価償却費の差額などにより発生する国立大学法人特有の構造上の利益 (現金の裏付けなし) が8.5億円発生しています。この利益相当額は今後発生する減価償却等の損失補償に使用されるため「積立金」として申請します。
- 残り2.1億円は H23予算上の残額として、翌年度以降に中期計画に定められた用途に従い使用可能な「目的積立金」として文部科学大臣に申請します。

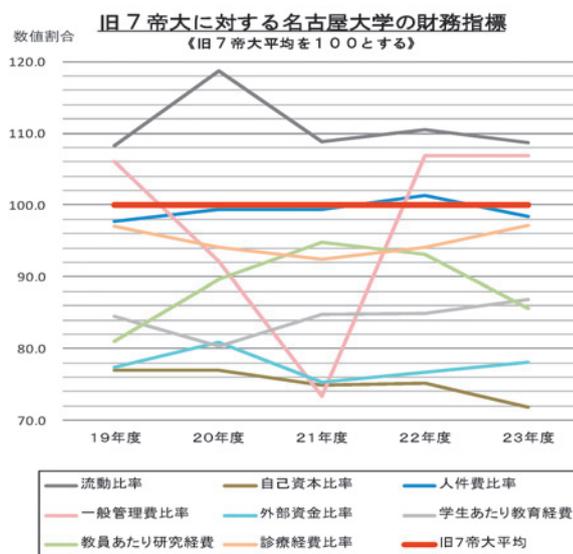


財務データにみる名古屋大学《財務指標比較》



財務指標		性質と基準		22年度	23年度	増減	判定
流動比率	流動資産÷流動負債	健全性	高	98.4%	96.2%	▲2.2ポイント	↓
自己資本比率	自己資本÷(負債+自己資本)	健全性	高	48.8%	49.8%	1.0ポイント	↑
人件費比率	人件費÷業務費	効率性	低	48.0%	49.4%	▲1.4ポイント	↓
一般管理費比率	一般管理費÷業務費	効率性	低	2.9%	2.9%	0.0ポイント	→
外部資金比率	(受託研究費等収益+寄附金収益)÷経常収益	発展性	高	10.9%	11.4%	0.5ポイント	↑
学生あたり教育経費	教育経費÷学生実員	活動性	高	186千円	206千円	20千円	↑
教員あたり研究経費	研究経費÷教員実員	活動性	高	5,459千円	5,875千円	416千円	↑
診療経費比率①	診療経費(減価償却費含む)÷病院収益	収益性	低	69.3%	66.6%	2.7ポイント	↑
診療経費比率②	診療経費(減価償却費含まず)÷病院収益	収益性	低	53.1%	53.0%	0.1ポイント	↑

- 財務分析とは、学長、理事、企業、文部科学省、金融機関など国立大学を取り巻く関係者が、大学に対する意思決定に必要な情報を得る目的から、国立大学の実態を明らかにし、経営内容を評価測定するために用いるものです。
- 同規模の他大学財務諸表を比較・分析することにより、本学の運営状況を正しく把握し、特色ある大学運営や効率的な予算の使用に活用していきます。
- これらの財務指標は、各年度の特異要因により左右されることがあるため、一概に大学の特色を示しているとは限りません。
- また、一般的な財務指標だけでなく通常、表面化されない指標（文部科学省プレス発表資料等に含まれています）を比較・分析することにより、各大学の財務的な特徴や重点事項などの特色を見ることが出来ます。



◎名古屋大学の財務諸表等・財務レポートに意関する情報はホームページでもご覧いただけます。

本学ホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/>) の「中期目標・中期計画・評価／情報公開／公表事項など」から「財務諸表など」を選択してください。

◆本件に関する照会先：名古屋大学財務部財務課決算グループ (zaimu-kgs@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23. 7.15	第44回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 ベストポスター賞	医学部附属病院医員	小澤 英史	西田佳弘（大学院医学系研究科准助教）、 他9名と連名
H23.11.13	第2回日本レックリングハウゼン病学会学会賞 (Riccardi 賞)	大学院医学系研究科准教授	西田 佳弘	
H24. 2. 6	ORS Award, 2012 ORS/OREF Travel Awards in Orthopaedic Research Translation	医学部附属病院医員	小澤 英史	
H24. 3.31	高温学会 論文賞	大学院工学研究科教授	堀 勝	
H24. 4.11	中華民國國家科學委員會 (NRC) 化學研究推動中心 (CRPC) レクチャーシップ	大学院理学研究科教授	篠原 久典	
H24. 5.24	電気学会 第68回電気学術振興賞 論文賞	大学院工学研究科教授	大久保 仁	
H24. 5.24	電気学会 第15回優秀技術活動賞 技術報告賞	大学院工学研究科准教授	加藤 丈佳	
H24. 5.25	日本分子イメージング学会 最優秀発表賞	大学院医学系研究科教授	山本 誠一	加藤克彦（大学院医学系研究科教授）と 連名
H24. 5.26	日本材料学会 平成23年度支部功労賞	大学院工学研究科教授	伊藤 義人	
H24. 5.26	電子情報通信学会 第73回功績賞	大学院工学研究科教授	佐藤 健一	
H24. 5.28	日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス 部門 JRM 表彰	大学院工学研究科准教授	山西 陽子	
H24. 5.30	高分子学会 高分子研究奨励賞	大学院工学研究科講師	飯田 拓基	
H24. 6. 1	International Union of Societies for Biomaterials Science & Engineering Fellow, Biomaterials Science & Engineering	大学院工学研究科教授	大槻 主税	
H24. 6. 8	第66回（平成23年度）日本セラミックス協会賞 学術賞	大学院工学研究科教授	大槻 主税	
H24. 6. 9	Poster Award, Third EUNE Gastric Cancer International Workshop European Guidelines for Gastric and Esophagogastric Junction Cancer	医学部附属病院病院助教	小林 大介	
H24. 6.14	Graduate University of Chinese Academy of Sciences Distinguished Professor Award	大学院工学研究科教授	堀 勝	
H24. 6.15	第51回（平成23年度）日本リンパ網内系学会総 会奨励賞	大学院医学系研究科助教	加藤 省一	中村栄男（大学院医学系研究科教授）、 他5名と連名
H24. 6.19	ドイツイノベーションアワード ゴッドフリード・ワグネル賞2012 優秀賞	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H24. 6.20	北村記念血液疾患研究基金 北村賞	大学院医学系研究科教授	小嶋 哲人	
H24. 6.29	日本接着学会 平成24年度（第34回）日本接着学会 奨励賞	大学院工学研究科講師	川口 大輔	
H24. 6.29	平成24年度 地域環境保全功労者表彰	大学院環境学研究科教授	林 良嗣	
H24. 7. 6	第74回耳鼻咽喉科臨床学会 優秀ポスター賞	医学部附属病院助教	大竹 宏直	
H24. 7.14	2012年度有機合成化学協会東海支部奨励賞	大学院生命農学研究科 准教授	中崎 敦夫	
H24. 7.26	2012年度包括型脳科学研究推進支援 ネットワーク 夏のワークショップ 若手優秀発表賞	大学院医学系研究科研究員	大籠 友博	平野健一（大学院医学系研究科 D4）、 小林和克（医学部附属病院医員）、 名取貴光（大学院医学系研究科客員研究員）、 門松健治（大学院医学系研究科教授）と連名
H24. 7.31	日本学術振興会 平成23年度特別研究員等審 査会専門委員（書面担当）の表彰	大学院理学研究科教授	久野 純治	
H24. 8. 6	日本学術振興会 第14回プラズマ材料科学賞 （基礎部門賞）	大学院工学研究科教授	堀 勝	
H24. 8. 7	日本神経科学学会奨励賞	大学院理学研究科教授	上川内あづさ	
H24. 8. 7	第24回世界家禽学会議ブラジル大会 国際家禽の学殿堂入り	大学院生命農学研究科 名誉教授	島田 清司	
H24. 8.13	AOGS Axford Medal (Asia and Oceania Geosciences Society)	名誉教授	上出 洋介	
H24. 8.19	Best Paper Award, 2nd Workshop on Cyber- Physical Systems, Networks, and Applications (CPSNA'12)	大学院情報科学研究科講師	加藤 真平	他3名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 8.21	2012年日本第四紀学会賞	年代測定総合研究センター教授	中村 俊夫	
H24. 8.22	第21回日本工学教育協会賞 航空機国際共同開発 DBT (Design Build-up Team) 人材育成 (社会人・学生混成教育)		名古屋大学 DBT 人材育成 チーム	佐宗章弘 (大学院工学研究科教授) が 代表者
H24. 8.26	第4回 JCHAT 賞 優秀論文賞	国際開発研究科教授	藤村 逸子	杉浦正利 (国際開発研究科教授)、 山下淳子 (国際開発研究科教授) と連名
H24. 9.11	第34回 (2012年度) 応用物理学会解説論文賞	大学院理学研究科教授	篠原 久典	
H24. 9.12	電子情報通信学会通信ソサイエティ活動功労賞	エコトピア科学研究所 准教授	岡田 啓	
H24. 9.12	電子情報通信学会通信ソサイエティ活動功労賞	エコトピア科学研究所助教	小林健太郎	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23.9.24	第5回日本緩和医療薬学会 優秀論文賞	医学部附属病院薬剤師	岸 里奈	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23.6.16	第3回日本膝・関節鏡・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) 関節鏡賞	大学院医学系研究科 D2	高松 晃	
H24.1.23	電気学会東海支部 電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	片岡 裕貴	
H24.3.15	Travel Award, the SOT 51st Annual Meeting of the Society of Toxicology 2012	大学院医学系研究科 D3	黄 振烈	
H24.3.20	日本原子力学会 フェロー賞	大学院工学研究科 M2	尾関 秀将	
H24.3.26	日本化学会 東海支部長賞	大学院理学研究科 M2	林 宏恩	
H24.3.26	第82回日本衛生学会学術総会 最優秀演題賞	大学院医学系研究科 D3	黄 振烈	
H24.5.14	平成23年度 情報処理学会東海支部 学生論文奨励賞	大学院情報科学研究科 D2	山田 晃久	
H24.5.23	地球電磁気・地球惑星圏学会 第130回講演会 学生発表賞 (オーロラメダル)	大学院工学研究科 D1	福島 大祐	
H24.6.1	電子情報通信学会東海支部 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 D2	宮崎 英志	
H24.6.1	電子情報通信学会東海支部 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	横井 貴紀	
H24.6.1	電子情報通信学会 平成24年電子デバイス研究会 論文発表奨励賞	大学院工学研究科 M2	久志本真希	
H24.6.2	分離技術会 平成24年度分離技術会年会学生賞	大学院工学研究科 D1	根路銘葉月	
H24.6.7	Distinguished Student Paper Award, Society for Information Display	大学院情報科学研究科 D3	塩見 友樹	上本啓太 (大学院情報科学研究科 M2)、 宮尾 克 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H24.6.13	CHIRALIT 2012 Poster Award	大学院工学研究科 M1	住田 栄佑	
H24.6.16	日本保健物理学会 学生研究優秀賞	大学院工学研究科 M1	山田 晋也	
H24.6.16	第48回日本循環器病予防学会 Young Investigator's Award 優秀賞	大学院医学系研究科 M2	王 超辰	八谷 寛 (大学院医学系研究科准教授)、 玉腰浩司 (大学院医学系研究科教授)、 上村真由 (大学院医学系研究科 D2)、 他7名と連名
H24.6.20	Reaxys PhD Prize 2012	大学院理学研究科 D3	デバシス マンダル	
H24.6.21	第12回日本蛋白質科学会年会 ポスター賞	大学院理学研究科 D3	水上 琢也	
H24.6.25	高分子学会 第22回バイオ・高分子シンポジウム 学生優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	赤羽真理子	
H24.6.29	日本セラミックス協会東海支部 第44回日本セラミックス協会東海支部 東海若手セラミスト懇話会 最優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	中北 行紀	
H24.6.30	日本古生物学会優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 特別研究生	望月 貴史	大路樹生 (環境学研究科教授)、他4名と 連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24.7.6	Hans Gros New Investigator Award, The 30th International Conference on Biomechanics in Sports	大学院教育発達科学研究科 D3	佐藤菜穂子	布目寛幸（総合保健体育科学センター准教授）、池上康男（総合保健体育科学センター教授）と連名
H24.7.10	名古屋大学学術奨励賞	大学院工学研究科 D3	内藤 豊裕	
H24.7.10	名古屋大学学術奨励賞	大学院理学研究科 D3	奥田 哲弘	
H24.7.10	名古屋大学学術奨励賞	大学院理学研究科 D3	大町 遼	
H24.7.12	International Student Research Experience Program in Chemistry (ISREP-Chem)	理学部 4年	久保田夏実	
H24.8.5	2012 PC Conference 学生論文賞	大学院情報科学研究科 M2	高木 英輔	近藤真由（大学院国際開発研究科助教）、安田孝美（大学院情報科学研究科教授）、他1名と連名
H24.8.10	名古屋大学若手女性研究者サイエンスフォーラム 総長賞	大学院理学研究科 M1	御田村侑香里	
H24.8.30	平成23年度情報処理学会 モバイルコンピューティングとユビキタス通信研究会 奨励発表賞	大学院工学研究科 M2	太田健太郎	
H24.8.31	第14回組込みシステム技術に関するサマワーショップ (SWEST14) ベストポスター賞 ゴールドベストポスター学生発表賞	大学院情報科学研究科 M2	太田 貴也	Daniel Sangorin（大学院情報科学研究科 D3）、本田晋也（大学院情報科学研究科准教授）、高田広章（大学院情報科学研究科教授）と連名
H24.9.7	第29回有機合成化学セミナー ポスター賞	大学院理学研究科 M2	武藤 慶	
H24.9.7	日本ヘルスコミュニケーション学会 第4回学術集会 ポスターセッション奨励賞	医学部 4年	井上 祥	阿部恵子（大学院医学系研究科助教）、安井浩樹（大学院医学系研究科准教授）、他5名と連名
H24.9.8	第41回日本蕨苔類学会優秀発表賞（ポスター発表部門）	大学院理学研究科 D1	一瀬 瑞穂	
H24.9.12	日本オペレーションズ・リサーチ学会 学生論文賞	大学院情報科学研究科 M2	川島 大貴	
H24.9.13	日本バイオメカニクス学会奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D3	井上功一郎	布目寛幸（総合保健体育科学センター准教授）、池上康男（総合保健体育科学センター教授）と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
1 現代日本誤百科 (665) : 運転では「経験値が上」町田 健文学研究科教授	8.15 (水)	中日 (朝刊)
2 法学研究科附属法情報研究センターが地方自治体の条例作成を支援するシステムを開発し10月にインターネットで公開	8.16 (木)	日経 (朝刊)
3 第3回「原発事故と私たちの暮らし」連続学習交流会開催：9日 高野雅夫環境学研究科准教授が講演	8.16 (木)	中日 (朝刊)
4 第23回日本数学コンクール開催：11日 宇澤 達多元数理科学研究科教授が実行委員長を務める	8.16 (木)	中日 (朝刊)
5 地震予知研究について野依良治本学特別教授は「国際的に開かれた予知研究にしてほしい。『予知ムラ』だけでなく」と話し、山岡耕春環境学研究科教授は「災害は地域の問題。各地域の問題解決に向き合うことで、信頼回復の道を探りたい」と話す	8.16 (木)	朝日 (朝刊)
6 現代日本誤百科 (666) : 「ウィメン」ズマラソン 町田 健文学研究科教授	8.16 (木)	中日 (朝刊)
7 高校野球秋季大会：15日 教育学部附属高等学校が名古屋国際高等学校に0-12で敗れる	8.16 (木)	読売
8 発光言：「小1の壁」を解消することが、少子化に歯止めをかける近道 濱口総長	8.17 (金)	日経 (朝刊)
9 名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」開催：9月15日～2013年3月16日	8.17 (金)	中日 (朝刊)
10 東海学生アーチェリー夏個人選手権大会本戦：山本真也さん本学学生（男子個人の部2位）、山田萌恵さん本学学生（女子個人の部2位）	8.17 (金)	読売
11 石原一彰工学研究科教授などはCPL原料のε-カプロラクトンを高収率に合成する新たな反応技術の確立に成功	8.17 (金)	化学工業日報
12 谷口純一さん本学4年生が三重県御浜町で風伝おろしの撮影に成功	8.17 (金)	中日 (夕刊)
13 伊丹健一郎理学研究科教授などはクロスカップリング反応を従来よりも容易に行う方法を開発	8.17 (金)	朝日 (朝刊)
	9. 4 (火)	中部経済新聞

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
14 長谷川達也エコトピア科学研究所教授などはメタンガスを自動車燃料に利用するための技術を開発	8.18 (土)	読売
15 博物館実験展示「メディアアート展」開催：17日～25日	8.18 (土)	中日 (朝刊)
16 高校野球秋季県大会：17日 教育学部附属高等学校が富田高等学校に3-12で敗れる	8.18 (土)	読売
17 テクノ・フェア名大2012「未来を明日に近づける技術」開催：31日	8.18 (土) 8.22 (水)	読売 日刊工業
18 岩田 哲工学研究科准教授などは国際標準の暗号 GCM の安全性に欠陥があることを突き止めたと発表	8.18 (土) 8.24 (金)	中日 (朝刊) 日刊工業
19 山本章夫工学研究科教授が電気事業連合会の関係企業から資金提供を受けた原子力関係の審議会の委員であると公表される	8.19 (日)	中日 (朝刊)
20 高校野球秋季県大会：18日 教育学部附属高等学校と名南工業高等学校との試合は0-4降雨ノーゲーム	8.19 (日)	読売
21 本学の海外学生との活動が大学が提供する主な国際体験として取り上げられる	8.20 (月)	読売
22 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が今秋に交代	8.20 (月)	朝日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
23 高校野球秋季県大会：19日 教育学部附属高等学校が名古屋大谷高等学校に0-4で敗れる	8.20 (月)	読売
24 「LHC 実験にて 新粒子 (ヒッグス粒子?) 発見」開催：19日 戸本 誠理学研究科准教授が「検出装置には名大などの日本の技術が大きく貢献している」などと話す	8.20 (金)	中日 (朝刊)
25 篠原久典理学研究科教授は理学系の博士課程離れについて「このままでは知の国際競争から脱落しかねず日本の未来は暗い」と危惧する	8.21 (火)	日経 (朝刊)
26 現代日本誤百科 (668)：本場の味「そのままに食べられる」町田 健文学研究科教授	8.21 (火)	中日 (朝刊)
27 論点：原子力規制委員会 鈴木康弘減災連携研究センター教授	8.21 (火)	読売
28 後藤百万医学系研究科教授が排尿障害の現状や課題について解説	8.21 (火)	中日 (朝刊)
29 法学研究科は日本法教育研究センターで学ぶアジア諸国の大学生を招き交流会を開催	8.21 (火)	中日 (朝刊)
30 顔：東京理科大学教授辻本 誠氏本学元教授	8.21 (火)	読売
31 野依良治本学特別教授が日本の大学院の現状について「学生の囲い込みが甚だしく、流動性がない」と話す	8.22 (水)	日経 (朝刊)
32 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生の交代について解説	8.22 (水)	朝日 (朝刊)
33 現代日本誤百科 (669)：「放置で消火するたばこ」町田 健文学研究科教授	8.22 (水)	中日 (朝刊)
34 第16回博物館特別展「大モンゴル展」開催：3月17日(土)～8月31日(金)	8.22 (水)	朝日 (夕刊)
35 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：10月8日 下村 脩本学特別教授が講演	8.23 (木)	読売
36 谷口 元工学研究科教授が委員長を務める稲沢市公共施設のあり方検討委員会は保育園再編案を提示	8.23 (木)	朝日 (朝刊)
37 羽田野真帆さん国際開発研究科大学院生は名古屋難民支援室の初代コーディネーターに就任	8.24 (金)	朝日 (朝刊)
38 岡村鉄兵さん環境学研究科大学院生などが岐阜県揖斐川町の古民家で自作の小水力発電機がつくる電気だけで生活をする実験を紹介	8.25 (土)	朝日 (夕刊)
39 石原一彰工学研究科教授はランタン触媒で医薬品などの原料となるエステルを合成する技術を開発	8.25 (土) 8.27 (月) 8.28 (火) 9. 4 (火)	中日 (朝刊) 化学工業日報 日刊工業 日刊工業
40 From60：英文学に人生かけ 岩崎宗治本学名誉教授	8.26 (日)	毎日 (朝刊)
41 地球を読む：野依良治本学特別教授は日本がV字回復するには「科学技術の強化と有効活用こそが有力な選択肢」と話す	8.26 (日)	読売
42 山田基成経済学研究科准教授は愛知県の自動車部品産業について「新規分野に人や資金を振り向けようという経営志向が生まれにくかった」と解説	8.26 (日)	朝日 (朝刊)
43 2012「防災の日」NIKKEI シンポジウム「東日本大震災から1年半の教訓を考える」開催：9月1日 福和減災連携研究センター長、廣井 悠同准教授が講演	8.26 (日)	日経 (朝刊)
44 伴 信太郎医学系研究科教授が医療人材の育成について話し、小川莉奈さん医学部6年生、井手天翔さん同1年生が自身の進路について語る	8.26 (日)	朝日 (朝刊)
45 篠原久典理学研究科教授と首都大学東京のチームは「金属内包フラーレン」を素早く精製する技術を開発	8.27 (月)	日刊工業
46 現代日本誤百科 (671)：「復興の真っ最中」町田 健文学研究科教授	8.27 (月)	中日 (朝刊)
47 学校と私：作家宮本延春氏本学卒業生	8.27 (月)	毎日 (朝刊)
48 海外メディア：春名幹男国際言語文化研究科客員教授がロンドン五輪における海外メディアの記事について解説	8.27 (月)	読売
49 文部科学省科学技術政策研究所の調査で本学の論文被引用数が物理学と化学の分野で最上位ランクに入る	8.27 (月)	毎日 (朝刊)
50 長谷川達也エコトピア科学研究所教授が生ゴミから生成したバイオメタンガスを燃料に使う自動車を公開	8.27 (月) 8.28 (火)	中日 (夕刊) 日経 (朝刊) ほか2社

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
51 工学研究科博士課程（前期課程）の入学選抜試験で出題ミス	8.27 (月)	中日 (夕刊) 毎日 (朝日)
	8.28 (火)	朝日 (朝刊) 読売
52 武村雅之減災連携研究センター寄附研究部門教授は関東大震災の津波が迫る瞬間をとらえた写真が発見されたことについて「関東大震災時の津波そのものの写真は、知る限り残っていない」と話す	8.27 (月)	朝日 (夕刊)
53 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生は公用車が襲われた事件に対し「中国側にしっかり申し入れをし、日中間の人的、経済交流が円滑に行われるよう取り組む」とコメントを発表	8.28 (火)	中日 (朝刊) ほか2社
	8.29 (水)	朝日 (朝刊)
54 伊丹健一郎理学研究科教授が新素材として活用が期待できるカーボンナノチューブの合成に成功	8.28 (火)	中日 (朝刊) 読売
55 故石岡繁雄氏本学卒業生の研究資料や遺品が本学に寄託される	8.28 (火)	中日 (朝刊) 読売
56 現代日本誤百科 (672)：「信号が無いのが事故の温床」町田 健文学研究科教授	8.29 (水)	中日 (朝刊)
57 朝日地球環境フォーラム2012開催：10月15、16日 益川敏英本学特別教授が対談、パネル討論にトヨタ自動車副会長内山田竹志氏本学卒業生など	8.29 (水)	朝日 (朝刊)
58 豊田講堂にてピンクリボンシンポジウム開催：10月14日	8.29 (水)	朝日 (朝刊)
	9. 8 (土)	朝日 (夕刊)
59 福和減災連携研究センター長と山岡耕春環境学研究科教授が委員を務める内閣府中央防災会議の有識者会議が南海トラフ地震の被害想定を公表	8.30 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
60 福和減災連携研究センター長は南海トラフ地震について「大きな被害想定には、あきらめないで対策をとってほしいとのメッセージが込められている」と話し、鷺谷 威同教授は「これだけ大規模な地震に襲われたとしても、日本ならば被害を最低限に減らせるということを世界に示したい」と話す	8.30 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
61 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：10月12日 野依良治本学特別教授が「科学の開国」をテーマに講演と討論	8.30 (木)	読売
62 現代日本誤百科 (673)：「チケットは買ったがボイコット」町田 健文学研究科教授	8.30 (木)	中日 (朝刊)
63 日本経済新聞社による調査で本学が産学連携で評価する大学ランキングで7位、新卒で研究者を採用したい大学ランキングで6位に入る	8.30 (木)	日経 (朝刊)
64 堀 克敏工学研究科教授は炭素繊維に微生物が付着しやすい原因を解明	8.30 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
65 吉田久美情報科学研究科教授の研究グループはアジサイの花色を青くする作用のあるアルミニウムイオンを運ぶたんぱく質の遺伝子を特定	8.30 (木)	朝日 (夕刊) ほか2社
	8.31 (金)	中日 (朝刊) 読売
66 豊國伸哉医学系研究科教授と赤塚慎也医学系研究科助教は体内の鉄分が過剰になるとがんになるリスクが高まることを突き止めた	8.31 (金)	中日 (朝刊) 読売
67 小澤正直情報科学研究科教授が今年創設された第1回藤原洋数理学賞の大賞を受賞	8.31 (金)	朝日 (朝刊)
68 2012年度日本建築学会[東海]記念シンポジウム「名古屋・愛知・東海の防災とまちづくり」が豊田講堂にて開催：14日 福和減災連携研究センター長、村山頭人環境学研究科准教授が講演	8.31 (金)	読売
	9. 9 (日)	中日 (朝刊)
69 名大カフェ “Science, and Me” 第26回「ヒッグス粒子をつかまえる」開催：9月5日 戸本 誠理学研究科准教授	9. 1 (土)	中日 (朝刊)
70 大路樹生博物館教授と杉田 護遺伝子実験施設教授が公益財団法人大幸財団学術研究助成の助成先に決定	9. 1 (土)	中日 (朝刊)
71 廣井 悠減災連携研究センター准教授が震災時の帰宅困難者対策について「帰らない選択が最優先」と話す	9. 1 (土)	中日 (朝刊)
72 辻本哲郎工学研究科教授が豪雨時の避難について「仮に被害が出なくても、いい訓練になったと思えばいい」と話す	9. 1 (土)	読売
73 鈴木康弘減災連携研究センター教授が活断層に関わる自治体の対策について「活断層の位置を詳しく知らせて、どのような被害が起きるかを皆で考える下地をつくること」と話す	9. 1 (土)	朝日 (朝刊)
74 現代日本誤百科 (674)：太陽の「半径が求まる」町田 健文学研究科教授	9. 3 (月)	中日 (朝刊)
75 毛利佳年雄本学名誉教授と愛知製鋼株式会社技監本蔵義信氏が産学官連携功労者表彰で文部科学大臣賞受賞	9. 3 (月)	中日 (朝刊)
76 社説：駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生の乗った公用車が襲われた事件について	9. 3 (月)	読売
77 斎藤貴史さん法学部3年生と諏訪真梨子さん同2年生が毎日新聞中部本社で研修を行う	9. 4 (火)	毎日 (朝刊)
78 なぜだまされる1：本学と富士通株式会社が共同開発した振り込め詐欺を電話から判断するソフトの実証実験を紹介	9. 5 (水)	読売
79 現代日本誤百科 (676)：「大量殺人を突き進む」町田 健文学研究科教授	9. 5 (水)	中日 (朝刊)
80 「ニッポンの食、がんばれ！セレクション」フォーラム開催：8月8日 生源寺真一生命農学研究科教授が座談会で「日本の伝統的な食品製造業が私たち日本人の伝統的な和食を支えている。ぜひ応援していきたい。」と話す	9. 5 (水)	中日 (朝刊)
81 大内乗有医学系研究科寄附講座教授が心筋梗塞の進行を妨げるホルモンの働きを発見	9. 6 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
82 工学部学生と工学研究科大学院生が中日本航空専門学校で行われた実習会に参加。柴田泰賢さん工学部3年生は「大学の勉強が現場につながっていると分かり、勉強へのモチベーションが上がった」と話す	9. 6 (木)	中日 (朝刊)
83 第4回アジア文化芸術祭開催：17日 ワールドリンクサービス株式会社代表取締役プレマスリ・サマラクーン氏本学卒業生が「平和になった母国(スリランカ)のことを伝えたい」と話す	9. 6 (木)	中日 (朝刊)
84 ジャパンスチールブリッジコンペティション2012開催：8月31日～9月1日 本学が総合優勝	9. 7 (金)	日刊工業
85 名古屋難民支援室の初代コーディネーター羽田野真帆さん国際開発研究科大学院生が開く日本語教室に伊藤 愛さん本学大学院生がボランティアとして参加し「彼女の積極的な行動が共感を呼び、若い世代が難民支援に関心を持つようになったと思う」と話す	9. 7 (金)	中日 (朝刊)
86 今津孝次郎本学名誉教授がいじめについて悩んでいる読者に「個々のいじめ問題ではなく、クラス全体の秩序が壊れているのでは」と助言	9. 7 (金)	中日 (朝刊)
87 名古屋大学レクチャー2012「青色LEDが拓いた光の革命」ー赤崎博士の足跡ー開催：10月6日	9. 7 (金)	中日 (朝刊)
88 訃報：三重大学名誉教授齋藤克己氏本学卒業生	9. 7 (金)	中日 (朝刊)
89 あいちサイエンスフェスティバル2012市民向け講演会「先端科学技術と社会ー国産ジェット旅客機MRJを世界の空へ！ー」開催：29日	9. 7 (金)	日刊工業
90 上川内あづさ理学研究科教授は本学の環境について「決め手は学童保育があったこと。いつでも歩いて迎えにいけるところが魅力。研究者の道を進むのに女性ということが障害とは思わない」と話す	9. 8 (土)	中日 (夕刊)
91 戸本 誠理学研究科准教授がヒッグス粒子の発見に挑む国際研究チームの一員として紹介される	9. 8 (土)	中日 (夕刊)
92 朝日カルチャーセンター新講座：「紫式部と「源氏物語」の絵画」高橋 亨本学名誉教授	9. 8 (土)	朝日 (夕刊)
93 教育学部附属中・高等学校講演会「グローバル化時代の中・高校生へのメッセージ」開催：7月11日	9.10 (月)	大學新聞
94 廣井 悠滅災連携研究センター准教授は大規模地震発生時の帰宅困難者対策について「自治体だけで一時滞在施設を確保するのは難しく、企業の協力が必要」と話す	9.11 (火)	朝日 (朝刊)
95 現代日本誤百科 (678)：「議論は平行線のまま」町田 健文学研究科教授	9.11 (火)	中日 (朝刊)
96 第35回日本神経科学大会市民公開講座「脳とこころの健康科学」開催：15日 貝淵弘三医学系研究科教授が大会長を務め、尾崎紀夫同教授が講演	9.11 (火)	中日 (朝刊)
97 ミリアム・ゼールさん本学大学院生は大村知事と語る会で「愛知は留学生をサポートするボランティアもあり、安心して暮らせることをもっと外国でアピールしたらいい」と話す	9.11 (火)	中日 (朝刊)
98 2013年度国立大学入試要項	9.11 (火)	中日 (朝刊)
99 訃報：児童文学作家赤座憲久氏 医学部に献眼、献体	9.11 (火)	中日 (朝刊)
100 現代日本誤百科 (679)：「疑問を差し込む」町田 健文学研究科教授	9.12 (水)	中日 (朝刊)
101 歴史の時間 ミニ展示会ー名古屋大学医学部・附属病院の歴史を遡ってー開催：11～28日	9.12 (水)	中日 (朝刊)
102 2012年新司法試験の合格者が発表され本学法科大学院は44名が合格し全国で12位となる	9.12 (水)	中日 (朝刊) ほか4社
103 現代日本誤百科 (680)：「過酷な事故」町田 健文学研究科教授	9.13 (木)	中日 (朝刊)
104 大平英樹環境学研究科教授が動物とふれあうことで得られる効果について解説	9.13 (木)	朝日 (夕刊)
105 本学などが加盟する東海学生山岳連盟が三重県御在所岳で開催する「ゴザフェス」が紹介される	9.13 (木)	朝日 (夕刊)
106 早川雅司理学研究科准教授と青山龍美基礎理論研究センター特任准教授らのグループは電子の磁気能率の大きさを従来の10～20倍の精度で理論的に計算することに成功	9.14 (金)	中日 (朝刊)
107 愛知工科大学シンポジウム in 蒲郡「三河湾に襲来する最大級台風・高潮・津波の予測」開催：13日 川崎浩司工学研究科准教授が講演	9.14 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
108 歴史的建造物「名古屋市公会堂」語る・観る・触れる Vol.3開催：10月2日 大森博司環境学研究科教授と西澤泰彦同准教授が講演	9.14 (金)	中日 (朝刊)
109 中日春秋：上出洋介本学名誉教授著「太陽と地球のふしぎな関係ー絶対君主と無力なしもべ」が引用される	9.14 (金)	中日 (朝刊)
110 医学部附属病院は診療録の印刷プログラムに不具合があったと発表	9.15 (土)	中日 (朝刊) ほか2社
111 室原豊明医学系研究科教授と大内乗有同寄附講座教授などは脂肪から放出されるホルモンに傷ついた血管を修復する機能があることを突き止めた	9.15 (土)	中日 (朝刊)
112 福井康雄理学研究科教授が超新生爆発の残骸でエックス線が発生する仕組みを解明	9.15 (土)	中日 (朝刊)
113 書籍：「いまだから伝えたい戦時下のことー大学教員の戦争体験記ー」益川敏英本学特別教授と諏訪兼位同名教授ほか著	9.15 (土)	朝日 (夕刊)
114 鷺谷 威滅災連携研究センター教授は深発地震について「昔は震源地は地図上の位置しか示さず、深さという概念はあまり考慮されてこなかった」と話す	9.15 (土)	中日 (朝刊)
115 名古屋第一赤十字病院血管外科部長錦見尚道氏本学卒業生が下肢静脈瘤について解説	9.15 (土)	中日ローズ
116 第24回博物館企画展「西篠八束と日本陸学の流れ」開催：9月11日～11月10日	9.15 (土)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月11日(火)～11月10日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第24回博物館企画展
「西條八束と日本陸水学の流れ」

[関連講演会]

10月20日(土)

場 所：博物館講義室
時 間：14:00～15:30

講演題目：「西條八束さんとお父上の西條八十さん」

講 演 者：諏訪兼位氏（本学名誉教授）

参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務局 052-789-5767

10月1日(月)～11月2日(金)
(期間中の平日)

場 所：三井住友銀行 SMBC パーク栄、
名古屋テレビ塔スカイデッキ、
ジュンク堂書店ロフト名古屋店

時 間：18:30～20:00

定 員：約30名（先着順）

参 加 費：無料

さかえサイエンストーク

内 容：技術やものづくり、カルチャーまで広くサイエンスの話題を取り上げる
研究者・専門家との交流イベント

[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル

事務局 052-747-6527

10月9日(火)～26日(金)

場 所：博物館野外観察園展示室

時 間：10:00～16:00

休 園 日：土・日曜、祝日

(10月20日(土)は特別開室)

入 場 料：無料

サイエンスイラストレーション・
サマースクール2012 in あいち
受講者作品展



[問い合わせ先]

産学官連携推進本部

あいちサイエンスフェスティバル

事務局 052-747-6527

10月27日(土)、11月10日(土)、
12月1日(土)、12月15日(土)、
1月19日(土)、2月2日(土)

場 所：インキュベーション施設 1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～15:00

対 象：大学院生、ポスドク

参 加 費：無料

ビジネス人材育成センター
平成24年度後期 B 人セミナー

テ ー マ：「製造業における、研究開発例と企業が求める人材」

「博士・PDのための就職ガイダンス」(10/27)

「博士の就活スタート・リスタート」

「10年後の医薬品・医療機器産業をデザインする」(11/10)

「ビジネス人の基本スキル」、「サイエンスコミュニケーションとは、

サイエンスコミュニケーションの手法」(12/1)

「グローバルスタンダードで使われる伝達スキル」

「ビジネスマナーの基本とその応用」(12/15)

「Communications Styles」、「弁理士の業界と業務」(1/19)

「博士に必要なスキル」、「プレゼンテーションスキル研修」(2/2)

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

10月17日(水)

場 所：文系総合館 7階オープンホール

時 間：18:30～20:00

対 象：大学院生、研究員、他

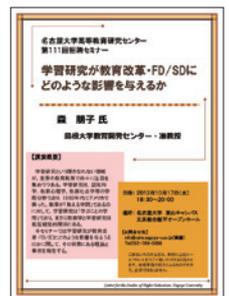
参 加 費：無料

高等教育研究センター第111回招へいセミナー

内 容：学習研究が教育改革・FD/SD にどのような影響を与えうるのか
に関してその背景にある理論と事例を報告する

講演題目：「学習研究が教育改革・FD/SD にどのような影響を与えるか」

講 演 者：森 朋子氏（島根大学准教授）



[問い合わせ先]

高等教育研究センター

助教 齋藤芳子 052-789-5696

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月20日(土)

場 所：東山キャンパス、大幸キャンパス
参 加 費：無料

第8回ホームカミングデー

テ ー マ：「世界のなかの日本、日本のなかの世界」
内 容：名古屋大学の集い、学術講演会、
名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート、
名古屋グランパスサッカースクールによるサッカー教室、
理系女子コミュニティ「あかりんご隊」による科学実験、他



[問い合わせ先]

総務部総務課 052-747-6558

10月20日(土)

場 所：医学部保健学科東館4階大講義室
時 間：10:00~12:10
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

医学系研究科(保健学) 平成24年度市民公開講座

テ ー マ：「感染症をめぐる最近の話題：薬剤耐性菌、子宮がんウイルス」
講演題目：「薬剤耐性菌の広がりとその予防にむけて」
講 演 者：川村久美子(医学系研究科准教授)
講演題目：「予防できるがんー子宮頸がんー」
講 演 者：今井律子氏(西知多医療厚生組合東海市民病院技師)



[問い合わせ先]

医学系研究科(保健学)教務学生掛
ihogakumu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

10月20日(土)、11月17日(土)、 12月15日(土)

場 所：博物館野外観察園
時 間：10:30~12:20、14:00~16:00
定 員：24名(各回)
対 象：小学生以上
(小学生は保護者同伴)

観測知にふれるハンズオン・ギャラリー

内 容：「観測知」を理解するための体験ギャラリーをまわり、
共通する研究アプローチの「観測知」を体感する



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月20日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：11:30~12:30、13:30~14:30

ミクロの探検隊

内 容：身近な植物や動物を電子顕微鏡で観察

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月20日(土)

場 所：博物館野外観察園
時 間：11:00~16:00

博物館野外観察園公開

案 内：西田佐知子(博物館准教授)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

10月20日(土)

場 所：博物館前庭、玄関ロビー
時 間：11:00~11:40、13:00~13:40

石の彫刻による Muse therapy

内 容：石の彫刻に関するトーク
講 演 者：絹谷幸太氏(博物館研究協力者)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月23日(火)～11月6日(火)
場 所：中央図書館 4階展示室
時 間：9:30～16:30
入 場 料：無料

附属図書館2012年秋季特別展
「時を超える贈り物
ー世界のなかの日本・日本のなかの世界」



[問い合わせ先]
附属図書館受付カウンター 052-789-3678

10月23日(火)
場 所：情報基盤センター 4階演習室
時 間：13:30～15:00
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成24年度第7回情報連携統括本部公開講演会・研究会
講演題目：「可視化、見える化、AR」
講 演 者：宮地英生氏（サイバネットシステム株式会社社長）

[問い合わせ先]
情報推進部情報推進課 052-789-4368

10月25日(木)
場 所：国際協力機構研究所 2階
国際会議場（東京都新宿区）
時 間：13:00～17:30
参 加 費：無料

**国際開発研究科・国際協力機構研究所
共同国際シンポジウム**
テ ー マ：「教育分野におけるアジア新興ドナーと日本：アジアらしさの模索と多様性」
内 容：アジア・ドナーの教育分野での途上国支援に焦点を当てて比較し、相違点
と同時に共通項を探り、相互理解を深めるとともに連携も含めた今後の
可能性を模索する
講 演 者：山田肖子（国際開発研究科准教授）、
結城貴子氏（国際協力機構研究所研究員）、他

[問い合わせ先]
国際開発研究科
准教授 山田肖子 052-789-4968

10月26日(金)、27日(土)
場 所：早稲田大学アジア太平洋研究科
（東京都新宿区）
参 加 費：10 US ドル

国際開発研究科 国際教育開発フォーラム
内 容：教育開発分野の研究を行っている大学院生（国内4大学、海外6大学）が
研究成果発表、情報交換を行う。各大学の教員も参加し司会やコメンテ
ーターの役割を担う
参加大学：国際開発研究科、早稲田大学アジア太平洋研究科、他

[問い合わせ先]
国際開発研究科
准教授 山田肖子 052-789-4968

10月26日(金)
場 所：文系総合館 7階
カンファレンスホール
時 間：9:40～17:00
定 員：60名
参 加 費：無料

**第27回国際経済政策研究センター・
キタン国際学術シンポジウム**
テ ー マ：「新たな転換期の国際経済ーグローバル化・自由化と
所得不平等ー」



[問い合わせ先]
経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月27日(土)、28日(日)

場 所：木曽川の河原 (10/27)、
博物館 (10/28)

時 間：9:30~16:00 (10/27)、
10:00~13:45 (10/28)

定 員：20名

対 象：小学5年生から中学3年生と
その保護者
(中学生以上は個人参加可)

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第3回地球教室

ひらめき☆ときめきサイエンス

～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

テ ー マ：「河原の石で包丁をつくろう！石器づくりから学ぶ文化と自然」

内 容：岩石について学び、木曽川の河原で石を採集し、その石で包丁
をつくって料理をする



10月27日(土)

場 所：生命農学研究科附属フィールド
科学教育研究センター
東郷フィールド農業館

時 間：14:00~16:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

生命農学研究科

附属フィールド科学教育研究センター

東郷フィールド事務室 0561-37-0200

2012年度第2回農場講演会

講 演 者：阿部秀樹 (生命農学研究科准教授)

10月29日(月)~12月28日(金)

場 所：野外観察園展示室

時 間：10:00~16:00

休 園 日：土・日曜日、祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館サテライト展示「ミクロの探検隊写真展」

11月9日(金)

[記念講演会]

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール

時 間：14:30~16:00

参 加 費：無料

[記念式典]

場 所：シンポジウムホール

時 間：16:30~17:00

[問い合わせ先]

創薬科学研究科・

細胞生理学研究センター事務部

052-747-6586

創薬科学研究科 創設記念講演会・記念式典

講演題目：「創薬に貢献する有機合成化学」

講 演 者：福山 透 (創薬科学研究科特別招へい教授)

講演題目：「構造に指南された創薬戦略」

講 演 者：藤吉好則 (細胞生理学研究センター教授)

11月9日(金)

場 所：株式会社エッサム本社ビル3階
グリーンホール
(東京都千代田区)

時 間：14:00~18:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター

教授 浅沼修一 052-789-4232

平成24年度地球規模課題国際研究ネットワーク事業

(国際ネットワーク形成等の推進)

農学国際教育協力研究センター第13回オープンフォーラム

国際シンポジウム

テ ー マ：「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人研究者の育成の
現状と課題」

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月10日(土)

場 所：法政国際教育協力研究センター
2階 CALE フォーラム

時 間：10:30~17:30

定 員：30名

対 象：高校生

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

キャンパスアジア事業事務局

052-789-5221

第5回2012高校生向けセミナー

テ ー マ：「ASIA -アジアの法と社会について考えよう-」

内 容：講義、大学生・留学生と交流、グループディスカッション



11月13日(火)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社 3階
会議室 (名古屋市中区)

時 間：18:30~20:00

[問い合わせ先]

経済学研究科

附属国際経済政策研究センター

052-789-4945

国際経済政策研究センター・キタン会

第15回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「最近の金融経済情勢について」

講 演 者：櫛田誠希氏 (日本銀行名古屋支店長)

11月15日(木)、16日(金)

場 所：ウェスティンナゴヤキャッスル
(名古屋市西区)

時 間：13:00~17:50 (11/15)、

9:00~15:35 (11/16)

[問い合わせ先]

グローバルCOE推進室 052-744-1946

グローバルCOEプログラム

「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」

第4回国際シンポジウム

テ ー マ：「Global COE Symposium on Neuro-Tumor Biology and Medicine」

11月16日(金)

場 所：カフェフロンテ

時 間：18:00~19:30

参 加 費：無料

(会場にてドリンク等の注文が必要)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

第18回げんさいカフェー Gen Science Café

講演題目：「減災まちづくりをすすめていくために (仮題)」

講 演 者：村山顕人 (環境学研究科准教授)

【訂正とお詫び】

名大トピックス232号 (2012年9月発行) で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

232号5ページ・上 「濱口総長がタイを訪問」 本文25行目

【誤】 AC21際スクーリング

【正】 AC21国際スクーリング

名大トピックス No.233 平成24年10月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

工学部環境土木・建築学科における建築設計演習の講習会の様子
(平成24年7月20日)



126 学部の誕生と草創期③ — 理学部 —

名古屋大学（当時は名古屋帝国大学）に理学部が設置されたのは1942(昭和17)年のことで、今年で70周年をむかえました。

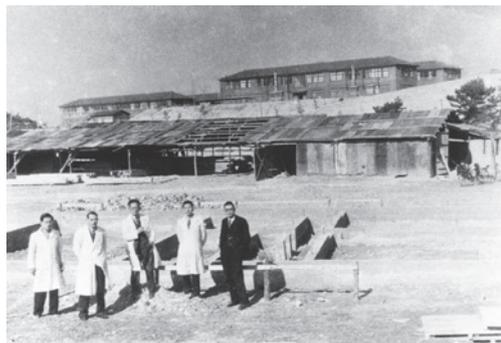
ただ、1939年の名帝大創立時には、理工学部としてスタートしました。名古屋を中心とする地元の人々は、理学部を独立して設置すること強く要望しましたが、1937年には日中全面戦争が始まっており、政府は戦争にすぐ役立つ学問を優先し、文系はもとより理系でも理学部や農学部の整備は後回しにされたからです。

それでも、1942年には理学部として独立することができました。この時、化学科、物理学科、数学科（現在の数理学科）、生物学科（現在の生命理学科）の4学科が置かれました（のち1949年に地球科学科（現在の地球惑星科学科）を設置）。ノーベル賞の益川敏英特別教授（素粒子宇宙起源研究機構長）と小林 誠特別教授の師である坂田昌一が教授として赴任したのもこの年です。また1944年には、や

はりノーベル賞の下村 脩特別教授を指導した平田義正が講師（同年中に助教授）に就任しています。

理学部創設時、学生定員は一学年50名と、現在の5分の1以下でした。しかも、基礎研究が軽視されたためか、1942年度の入学者は29名と定員を大幅に下回っていました。校舎は東山に新築されましたが、戦時体制下の物資不足のため、当初は木造2階建て4棟とお世辞にも立派なものではありませんでした。さらに1945年には、空襲を避けて各地に研究室を疎開させなければなりません。その後の空襲では、東山の生物学科の校舎を焼失しました。

こうした厳しい時代の制約はありましたが、初代理学部長の柴田雄次は第1回入学者への訓辞で、「教官等の当事者が定めた課程が文部省に届けてはあるが内容を制限されることはない。最高最新の学問が授けられ、教官学生相共に研鑽に努めるのである」と語りました。名大の自由闊達な学風の芽吹きを感じることができます。



- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | |
- 柴田雄次（1882-1980）。1942年に東京帝大教授から名帝大教授へ転じ、初代理学部長となった。その後、東京都立大学初代総長、日本学士院長を歴任。専門は無機化学で、日本学士院恩賜賞を受賞したほか、文化功労者に選出されている。
 - 初期の理学部教官（1949年、柴田雄次らの送別会の記念写真、理学部旧1号館玄関前にて）。前列右から6番目が柴田雄次、中列右から7番目が坂田昌一、後列右から6番目が平田義正。
 - 物理学科の教官と学生（1942年）。
 - 理学部創設当時の研究風景。
 - 工事中の理学部校舎（1943年頃）。現在の東山キャンパス工学部8号館・9号館等がある台地に位置していた。手前に見えるのは工事作業員用の飯場。